人と自然がともに呼吸しあえる総合的な環境づくり

Nelsis ネルシス

自然浴環境デザイン

Vol. 5

特集

21世紀のランドスケープ・エコロジー

まちに息づくアート

ストーリー・オブ・ベルリン ～都市の博覧会～

❖

破壊と創造の連鎖、あるいは歴史の分断。ベルリンは都市そのものがアートである。
ヘッドフォンを着用し、3D サウンドとともに 20 世紀のベルリンの激動をバーチャルに体験できるのがこのエキシビションだ。
ヴェルトシュタット（世界都市）といわれた 1920 年代の黄金時代から第三帝国、東西ドイツへと回顧される。
ハーケンクロイツをかたどった回転扉を入るとナチスの空間だ。ヒットラーとシュペーアのベルリン改造計画が現れる。
その後は DDR（東ドイツ）市民の生活の断片をジオラマで構成。
旧東を懐かしむオストロジー（オスト=東）で人気の信号機アンペルマンも登場し、
会場地下には冷戦下の核シェルターが残されている。
上映される 20 世紀初頭の空撮映画では、そのとき既にベルリンが完成されていたことに驚かされる。

文・写真……シヲバラ タク

［表紙写真／撮影：シヲバラ タク］
ストーリー・オブ・ベルリンの通路に展示されたアンペルマン（ドイツ）

人と自然がともに呼吸しあえる総合的な環境づくり

Nelsis ネルシス

自然浴環境デザイン

Nature（自然力）＋ Element（要素）＋ Oasis（やすらぎ空間）

CONTENTS

Vol.5
2004-2005

02 ［特集］まちに息づくアート……21 世紀のランドスケープ・エコロジー

04 街とアートの半世紀……❖ 竹田直樹
14 ［インタビュー］アートで都市空間を彩る……❖ 南條史生
18 ［インタビュー］アートプロジェクトで社会の価値転換を迫る……❖ 北川フラム
22 アートシティ・ベルリン……❖ シヲバラ タク
26 パリの新しい祭り「白夜：ヌイ・ブランシュ」……❖ 岡井有佳

30 がんばる自治体のまちづくり奮闘記 ❷

岩手県西磐井郡平泉町／子孫に誇れる町をつくろう！
世界遺産登録を目指し新たなまちづくりに挑戦する

38 ［シリーズ］自然浴環境――4

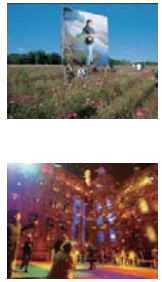
都心部の清流復元でヒートアイランドの緩和なるか
●ソウルの大規模な清流復活事業「清渓川復元」……❖ 一ノ瀬俊明
●市長のリーダーシップで始まった清渓川の復元プロジェクトに期待……❖ 島谷幸宏

44 Product Message ［プロダクト メッセージ］

●富士山レーダードーム公園（山梨県富士吉田市）●練馬区内の公園（東京都練馬区）●駒ヶ岳サービスエリア（長野県駒ヶ根市）●一本橋公園（山形県西村山郡）●野添であい公園（兵庫県加古郡）●石地海岸（新潟県刈羽郡）●西戸崎旅客待合所（福岡県福岡市）●朝霧川（兵庫県明石市）●あさぎ里山公園（大阪府茨木市）●新居傾斜堤防（高知県土佐市）●ファミールグラン代々木西原テグスターハウス（東京都渋谷区）●下野幌団地（北海道札幌市）●センチュリー病院（兵庫県姫路市）●新八代駅（熊本県八代市）●鹿児島中央駅西口（鹿児島県鹿児島市）●伊勢中川駅東口広場・西口広場（三重県一志郡嬉野町）

57 世界のストリートファニチャー ❹

スペイン：バルセロナ 空飛ぶじゅうたんのようなベンチ



■発行日／ 2004 年 10 月 1 日 ■発行／東洋エクステリア株式会社 〒 160-0022 東京都新宿区新宿 1-4-12
■企画・制作／フォンテルノ 〒 150-0013 東京都渋谷区恵比寿 4-5-25-806 ■印刷／凸版印刷株式会社

21世紀のランドスケープ・エコロジー

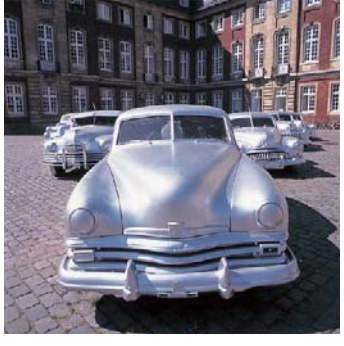
まちに息づくアート

特集

LANDSCAPE ECOLOGY

都市の再開発では、印象的なアートがまちを彩っています。
六本木ヒルズの広場に設置された蜘蛛の彫刻は、
その大きさとグロテスクな形でシンボリックな空間をつくりだしています。
また最近では、田んぼや畑、民家の中にアートを持ち込み、
都会との交流を生み出した村があります。
上野公園の西郷像のように、何かを記念してつくられた彫刻から、
人々をつなぐコミュニケーションとしての役割に主眼が置かれた
アートプロジェクトへと移り変わっているパブリックアートの
半世紀を概観しながら、これからの「まちとアート」の
さまざまな可能性をさぐってみます。

art



ナム・ジュン・パイク
「20 世紀のための 32 台の車」
ミュンスター野外彫刻展
1997 ／ Photos by Taku Shiobara
＊
「ミュンスター野外彫刻展」は
80 年代末に日本でも紹介され、
日本のアートプロジェクトの展開に
多大な影響を及ぼした

街とアートの半世紀

街とアートの関係史を日本の戦後に絞って概観してみたい。
まさに今、半世紀を超えるその歴史が転換しようとしている。
私たちは新しいパラダイム（系譜）の幕開けにいるのである。

art

文・写真……竹田直樹

1 彫刻設置事業のパラダイム

日本の戦後の街とアートの関係史をひもとくとき、最初に、自治体が公共事業のなかでつくった彫刻設置事業のパラダイムが横たわる。

プロローグ：男女の裸像・母子像の登場

終戦直後、街には、戦中に戦意高揚を図るために銅鉄供出の対象から除外され残存した軍人系の銅像が、いたるところにそびえ立っていた。フセイン像がそうであったように、これらのモニュメントは、GHQの指示に従い撤去、移設されていく。このお決まりの敗戦処理作業により、一時的に野外彫刻がほとんど消滅し、街には白いキャンバスのような状況が広がった。

そんななか、1950年代に入ると企業や市民団体が主体となり、世界に類例のない新しいタイプの野外彫刻の設置が始まった。「平和」「自由」「建設」などという戦後の新しいイデオロギーやスローガンを男女の裸体により表現する彫刻である（**写真1、2**）。匿名の平凡な隣人がモチーフとなり、その健康的な肉体がリアルに描かれる。イスラム教はいうまでもなく、キリスト教や儒教文化圏でも、この種の作品を公共的な場所に設置するのは抵抗があるに違いない。アカデミズムへの憧れの基底には、仏教系民間信仰が横たわるのではなかろうか。かつて安寧を祈願して村の入り口に設置された双体道祖神の示す、明るく濃厚な性的表現が思い出されるところである。

このタイプの設置事業は、60年代に入ると終息するが、「平和」を表現する母子像が定着し、全国に波及する。母子というモチーフはキリスト教美術にも見られるものの、日本の母子像は、かつての慈母観音像のように母親も裸体であることが多い。

いずれにしても、50年代の野外彫刻は、60年代以降の設置事業とは異なり、モニュメントとして認識しやすいものであった。一方で、裸像が多いという60年代以降の特徴に影響を及ぼすことになる。

写真1［左］●菊池一雄：平和の記念像，1950，千代田区三宅坂公園（最高裁判所前）／株式会社電通によって設置され、当時は大変な話題になったという。菊池は50年代に最も活躍した彫刻家の一人である。1958年には、広島の平和記念公園に「原爆の子の像」を制作した　**写真2**［右］●分部順治：建設と平和像，1953，前橋市前橋駅前／戦災復興事業により整備された駅前広場に民間が主体となって設置したもの

「彫刻のある街づくり」の始まり

60年代に入ると、美術作品としての彫刻を設置する新しいタイプの事業が始まり、彫刻設置事業のパラダイムの幕開けとなる。最初に着手したのは山口県宇部市で、日本の「彫刻のある街づくり」事業の第一号となった。公園課が担当していた、花を市街地に植栽する「花いっぱい運動」で集めた市民からの寄付金のわずかな残金で、58年に宇部新川駅前広場に「ゆあみする女」という模造品のホワイトセメント像を設置したところ、市民の間で大変な評判となる。この思わぬ出来事をきっかけとして、61年から「宇部を彫刻で飾る事業」が始まった。設置事業の枠組みをつくったのは、美術評論家の土方定一（ひじかたていいち：1904－80）である。アメリカ合衆国やフランスでも、このころから彫刻設置事業が始まるが、日本のものはそれらとは無関係であり、少なくとも当初はそれらを模倣するものではなく、オリジナリティに富むものだった。

写真3［左］●向井良吉：蟻の城，1962，宇部市常盤公園／彫刻設置事業の開始を記念する作品としてとらえてよいものだが、向井はこの作品について「私は作る側が公共性などを考えたら彫刻などはできない」と発言している。「社会から自律した」作品を目指したのである　**写真4**［上］●桜井祐一：あるポーズ，1965，宇部市常盤公園／「平和」「自由」「建設」など当時のイデオロギーやスローガンと無関係な美術作品としての野外彫刻の初期のもの

宇部市の事業は、2年ごとに野外彫刻展を開催して入賞作品を買い取り設置するという形態をとり、設置の対象となる作品は、以前の大部分の彫刻とは異なり、社会的価値観やイデオロギーなどとは無関係なテーマを持つ純粋な美術作品であった。抽象作品が多く、これまでの人物像とは大きく異なってはいたが、具体的な設置場所を踏まえて制作された作品ではなかった。

ここで、設置事業に、その名称からも明らかなように、都市環境を修景し、美観に優れたものとする目的、つまり景観形成にかかわる目的が生じたのである。この背景には、当時の宇部市は石炭産業による公害や無秩序な市街地の形成が全国的に有名で、環境改善に対する要求が強かったことがある（**写真3、4**）。

神戸市は、68年から宇部市とビエンナーレ形式により「現代日本彫刻展」を須磨離宮公園で開催するようになる。これも宇部市と同じ目的と内容を持つ事業であった。

70年代初頭は、公害問題をきっかけとして都市環境に対する関心が高まった時期である。都市を潤いのある快適な環境に整備しようとする機運が生じ、緑化が盛んに進められ、この過程で緑や花と同列のものとして彫刻がとらえられたのである。「彫刻＝緑・花」というような認識が形成される。

一方、アーティストの側から見れば、作品発表の機会が乏しかった当時において、宇部市と神戸市の野外彫刻展は貴重な作品発表の場となった。設置事業は都市環境整備を目的として推進されているにもかかわらず、アーティストは野外彫刻展における「社会から自律した」作品の発表を目的としていたわけで、両者の思惑には大きなズレが内在していた。当時のアーティストや美術関係者の多くは、米ソ冷戦構造のなか、プライベートな表現や抽象表現を禁止する社会主義リアリズムとの対立関係を踏まえ、作品の社会的な自律性が何より大切だと信じて疑わなかったのである。でも、これは裏を返せば、アーティストが社会から自律した作品を制作することにより、社会性を獲得できたということでもあった。ではあるが、ともかく風で動く彫刻や大規模な抽象作品など、野外に設置されることを想定しなければ制作されなかったであろう作品が登場したことは、設置事業が野外彫刻のみならず彫刻自体の発展に大きく貢献したことを示している。

彫刻設置事業の拡大

70年代は、「彫刻のある街づくり」事業がゆるやかに拡大する期間である。60年代は、都市環境整備に対する目的が重視されていたわけだが、ここで、新たな目的が付け加わることになる。

一つは75年ごろから始まる「文化の時代」という流れと関連する。この時期までは、評価基準があいまいで、客観性に欠ける文化を自治体が取り扱うことに対して警戒感があり、積極的な取り組みが行われてこなかった。ところが、所得水準が欧米諸国と肩を並べ、市民生活の関心が生活全般の質的向上、とりわけ文化的な面に移行する傾向が

写真 5［左］●佐藤忠良：緑の風，1978，仙台市台原森林公園／仙台市は、設置場所を踏まえた作品制作をアーティストに依頼する方法を採用した。この作品も設置場所を踏まえて制作されたが、後に同一の作品が他の場所にも設置されている　**写真 6**［右］●新宮 晋：遥かなリズム，1980，長野市城山公園／長野市は、既成の作品を購入し設置する方法で、設置事業を行った。したがって、作品は設置場所と無関係に制作されたもの

みられるなかで、自治体による文化行政の重要性が認識され、一種の文化行政ブームになる。もう一つは、やはりこのころから盛んにいわれるようになった「地方の時代」という流れと関連する。高度経済成長と過度の中央集権化により喪失した地方の魅力や個性を回復し、機能性、合理性を優先しすぎて画一化してしまった都市環境に人間性を取り戻し、人間的な豊かさを創造しようという動きである。

彫刻設置事業はこのような風潮のなかで活性化していった。とりあえず、結果が恒久的な「形」になる設置事業は、わかりやすい文化行政として自治体に好まれた。「彫刻＝文化」というような認識が形成されたのだ。野外彫刻に対し、生活空間に文化的要素を取り入れる、市民に芸術を普及啓蒙する、あるいは地域の個性を表現するというような意義が見いだされ、設置事業の新たな目的となる。設置事業はこれまでの都市環境整備に対する手段としてだけではなく、文化振興や地域の個性の表現にも貢献する複合的な目的を持つ事業に変化したのである。

長野市では既成の作品を購入するという方法で 73 年から、八王子市では彫刻シンポジウムというイベントを開催し完成作品を譲り受けるという方法で 76 年から、仙台市ではアーティストにオリジナル作品の制作を依頼するという方法で 77 年から設置事業を開始し、各事業が以後の他都市における事業のひな形となる。横浜市は設置事業に予算を編成することはなかったが、都市計画家の田村明（たむらあきら：1926 ―）が中心となり、民間活力を活用した独自の事業展開を開始した。この時期、彫刻家の佐藤忠良（さとうちゅうりょう：1912 ―）や新宮晋（しんぐうすすむ：1937 ―）などの活躍が目立つが、多数の彫刻家が設置事業のなかでデビューを果たす **（写真 5、6）**。

これらにやや先行する形で、帯広市は 70 年から、旭川市は 72 年から、札幌市は 72 年の冬季オリンピックの影響もあり、開催前後の期間にまとまった設置を行った。これら北海道の諸都市では、開拓地として潜在的に文化的要素に対する要求が強かったこと、冬季の景観形成として設置事業がとらえられたこと、本郷新（ほんごうしん：1905 ― 80）や山内壮夫（やまのうちたけお：1907 ― 75）など地元に優れた彫刻家が存在したことが、先駆的な設置事業の展開につながったと推察できる。

80 年代になると、全国レベルで設置事業は加速度的に拡大する。これらの都市は、いずれも前述の先進都市を事例としながら事業を推進し、作品の傾向も事例とした都市と類似する。ただし、設置場所を踏まえて制作される作品は一部でしかなかった。

彫刻設置事業の全盛と衰退

都市における設置事業はこんな具合に展開したが、田園地域でも新たな試みが始められる。これは 80 年代後半からブームになる「町おこし」「村おこし」、ならびに竹下内閣の「ふるさと創生基金」と関連する。過疎化に悩むいくつかの町村が彫刻設置事業を選択する。

88 年から神奈川県藤野町、89 年から広島県瀬戸田町、92 年から北海道洞爺湖周辺の三町村がそれぞれ独自の事業を開始した。いずれも、風光明媚な自然地を舞台としているが、その目的は、話題性の喚起とイメージアップによる観光振興、文化的雰囲気づくりによる地域社会の活性化といったところであった **（写真 7 ～ 9）**。

こうして大都市から農村や漁村、離島まで、全国津々浦々で彫刻設置事業が展開することになる。そのピークは 89 年にあり **（写真 10 ～ 14）**、以後バブル経済の破綻のなかで、90 年代半ば以降、設置事業は急速に激減する。95 年の阪神大震災が提示したガレキの山の情景が、人々の「物」に対する欲望を縮小したのではないかという人もいるが、米ソ冷戦の終結により、「社会から自律した」アートの存在意義が消滅してしまったことが、その深層に横たわると考えてよい。その証拠に、日本とほぼ同時期の 60 年代初頭から連邦政府の補助金を支給して巨大な抽象彫刻を主体とする大規模な設置事業を推進していたアメリカ合衆国は、レーガン政権以降、その予算を大幅に縮小したのである。

そして、日本で野外彫刻のことをパブリックアートと呼ぶようになったのは、実はこの時期なのである。ただし、それは「公共的な場所に設置された、社会から自律した美術作品」を意味していた。

アートディレクターの登場

こんな状況下にあって、パブリックアートは、新たな展開を見せる。これまでの彫刻設置事業の成果は、パブリックな空間に独立して存在する彫刻群であり、それらは必ずしも設置場所を踏まえて制作されるとは限らなかった。アーティストが設置場所を意識した制作を行ったとしても、作品を取り巻く都市空間がそれらに歩み寄ることは皆無に近かった。ところが、ここで登場する新たなパブリックアートは、建築や造園の一部となっ

写真 7［左］●池田 徹：森の記念碑，1990，神奈川県藤野町ふるさと芸術村／ 90 年代に入ると、農村や離島でも彫刻設置事業が行われるようになった
写真 8［右］●伊藤隆道：風の水面，1992，北海道壮瞥町洞爺湖／一周 36.5km の洞爺湖の周囲には、数十点の彫刻が設置され「とうや湖ぐるっと彫刻公園」になった

写真 9［左］●真板雅文：空へ，1989，広島県瀬戸田町サンセットビーチ／海水浴場にそびえ立つ大規模な抽象彫刻　**写真 10**［右］●フィリップ・キング：トワイライト・オベリスク，1989，千葉市幕張新都心／彫刻設置事業の最盛期の一点。当時、彫刻家はみな忙く、価格が急騰した。海外の彫刻家の参加も多かった

写真 11 ●建畠覚造：波貌，1990，品川区大井ふ頭中央海浜公園

写真 12 ●掛井五郎，加藤昭男：田園交響楽，1990，豊島区池袋西口公園

写真 13 ●籔内佐斗司：犬も歩けば…，1990，横浜市横浜ビジネスパーク

写真 14 ●大野秀敏：火の形，1990，渋谷区東京都体育館前

写真 15［左］●宮島達男：Luna，1994，立川市ファーレ立川／ファーレ立川では、換気塔、車止め、ベンチなどがアート化された　**写真 16**［右］●依田久仁夫、エステル・アルバダルダネ：ベンチに座るタチカワの女たち，1994，立川市ファーレ立川

写真 17［左］●ジュリオ・パオリーニ：Meridiana，1994，新宿区新宿アイランド／中庭の舗装パターンとして実現した作品。建築家とアーティストのコラボレーションによる　**写真 18**［右］●長沢英俊：Pleades，1994，新宿区新宿アイランド／建築外構の一部として実現した作品

たり、換気塔、車止め、ベンチ、照明施設などとしての機能を持つなど、都市空間と物理的に融合するものだった。

それは、アートディレクターという新たな役割を担う人々の登場により実現される。彼らは、与えられた再開発地などのフィールドを見て、多数の国内外のアーティストを選び、彼らと建築家や造園家とのコラボレーションを企画、誘導した。94 年にはアートディレクターの北川フラム（きたがわ：1946 ―）による立川市の「ファーレ立川」（**写真 15、16**）、南條史生（なんじょうふみお：1949 ―）による東京都新宿区の「新宿アイランド」（**写真 17、18**）が相次いで完成し、そこに設置された多数の作品のなかには、すでに「物」として独立して存在しない、つまり、その姿を建築や造園の中に埋没させるものまで現れる。

写真 19●ジェームズ・タレルによる建築のライティング。安藤忠雄設計の宝塚造形芸術大学・大学院サテライトの外壁をカラーキネティクスによるさまざまな色の光で演出。建築全体がアートになった

アーティストは作品ではなくその発想を建築家や造園家に対して提供することにより、パブリックアートを実現するようになったのだ。99 年には福岡市の「博多リバレイン」、2000 年にはさいたま市の「さいたま新都心」、2003 年には東京都港区の「六本木ヒルズ」で、大規模なパブリックアートが展開された。

「物」としての作品ではなく、アーティストの発想を都市空間の創造に活用しようという考え方は、今日さらに発展を見せた。例えば、アーティストが建築家と高度なコラボレーションを実現することにより、建築のコンセプトにまでアーティストの発想が反映され、結果として、都市空間全体がパブリックアートといえるような事例まで見られるようになっている。もちろん、その成果はすでに一般的な意味でのパブリックアートを超えている（**写真 19**）。

アーティストによる ランドスケープデザイン

彫刻設置事業やパブリックアートと並行する形で、それらに関連しつつ展開した、見落としてはならないもう一つのパラダイムが存在する。アーティストによるランドスケープデザインへのアプローチである。日本におけるこの分野は、アメリカ合衆国やフランスでユダヤ系のアーティストが中心となって繰り広げた、アースワークを源とする流れとは無関係だと考えてよい。

70 年代から 80 年代初頭にかけて、彫刻シンポジウム（複数の彫刻家が一堂に会して作品の制作を行うイベントで、59 年にオーストリアで始まり、日本やヨーロッパなどで現在も開催されている）において、彫刻家同士の共同制作という形態をとりつつ、都市公園などのオープンスペースの設計、施工が行われたことがある。この試みは、日本人彫刻家が始めたもので、その舞台はヨーロッパと日本であった。70 年のサンクトマルガレーテン（オーストリア）、71 年のニュールンベルグ（ドイツ）、73 年の香川県小豆島、81 年の山口県萩市などにつくられた作品は、石を素材とするものの、彫刻というよりは造園といったほうがよいものだった。彼らは、公共空間のデザインには、個人の個性に頼らないアノニマスな性質（匿名性）が必要だと考え、それを共同制作により達成しようと考えたのだ。個人の個性を超えた超個性に対する興味深い試みではあったが、残念ながら「奇跡のような類い希なる個性」を何より価値あるものだとする当時、そして今日の美術界を支配する価値観のなかで評価されることのないまま終焉したのであった。

ではあるが、これらのムーブメントから生まれた石彫家 3 人のユニット「環境造形Q」（68 年から 88 年まで活動）は、彫刻設置事業のなかで、作品設置場所の歴史や風景を活用した作品をコミッションワークとして多数実現し、彫刻設置事業の歴史に実り多い異色な一ページを加えることになる（**写真 20**）。

写真 20［上］●環境造形Q：水の広場，1984，名古屋市名城公園　**写真 21**［右上］●イサム・ノグチの最後のプロジェクトといわれる「札幌モエレ沼公園」は、189ha の敷地に、高さ 50m のモエレ山を中心として、遊具、野球場、テニスコートなどさまざまな施設を含む巨大な公園。98 年より順次オープンし、2005 年にグランドオープンする予定
写真 24［右下］●東京都日の出町の廃棄物処理場建設予定地の森の中に 1996 年につくられた若林奮による「緑の森の一角獣座」は、2000 年に東京都により強制収用された

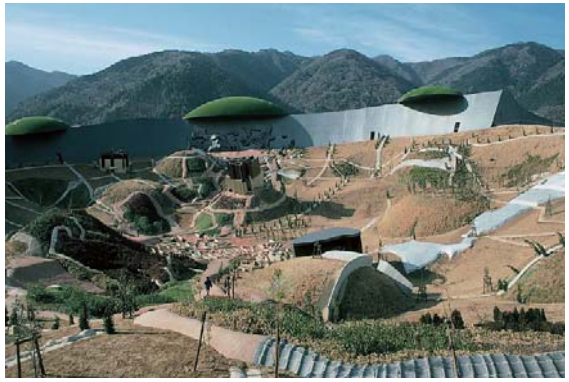


写真 22［左］●荒川修作、マドリン・ギンズ：養老天命反転地，1995，岐阜県養老町養老公園／面積＝約 1.8ha　**写真 23**［右］●廃校になった小学校を利用して 1997 年より整備が始まった北海道美唄市「アルテピアッツァ美唄」。彫刻家の安田侃によるスカルプチャーガーデン

90 年代に入るとアーティスト個人の発想が、庭園や公園として実現されるようになる。90 年から造成が始まった「札幌モエレ沼公園」は、イサム・ノグチ（1904 ― 88）が死の直前に制作した模型を実現するものである（**写真 21**）。95 年に岐阜県養老町の養老公園にオープンしたテーマパークのような有料施設「養老天命反転地」は、荒川修作（あらかわしゅうさく：1936 ―）とその夫人で詩人のマドリン・ギンズによって構想された（**写真 22**）。97 年より整備が始まった北海道美唄市の「アルテピアッツァ美唄」は、安田侃（やすだかん：1945 ―）による美しいスカルプチャーガーデンだ（**写真 23**）。2000 年に廃棄物処理場の造成により強制収用され消滅した東京都日の出町の「緑の森の一角獣座」は、若林奮（わかばやしいさむ：1936 ― 2003）が作ったものだった（**写真 24**）。これらの作品は、近代以降新たな様式の展開を停止した日本の庭園史を考えるうえで、重要な存在だといえるだろう。

2 アートプロジェクトのパラダイム

そして今日、ここまでに述べてきたパラダイムとは異質な新たなパラダイムが始まっている。60年代に宇部市や神戸市の彫刻設置事業に参加したアーティストは、その多くが当時三十代だった。彼らはその後、日本全国の設置事業のなかで活躍することになる。そして90年代に入り、彼らが60歳を迎え引退を考え始めたころ、新たなアーティストの集団が現れた。彼らの多くは三十代で、国内より海外での知名度が高く、招聘を受けつつ世界を渡り歩いて活動を継続し、「トーキョー・アート」と呼ばれる現代美術の最新のカテゴリーを形成する。誰も予想していなかった世代交代が一気に始まった。ここでは、この新世代による系譜のことを「アートプロジェクトのパラダイム」と呼ぶことにする。

アートプロジェクトの始まり

アートプロジェクトは、一過性の一種のイベントであり、市街地、ニュータウン、農村集落などさまざまな場所を舞台とし、終了すれば基本的にその物理的な痕跡は残らない。

こうしたアートプロジェクトは、90年代に突如、始まったわけではない。50年代半ばから70年代前半にかけて、関西を舞台に活動した具体美術協会の試みは、あまりに早いそのプロトタイプといえるものであるし、80年代前半には浜松市の砂丘を舞台に「浜松野外美術展」、80年代後半から90年代前半にかけては、岡山県牛窓町の農村で「牛窓国際芸術祭」などが開催されている。また、川俣正（かわまたただし：1953－）は、80年代初頭から独自にアートプロジェクトに着手していたのであった。

ただし、今日のアートプロジェクトに直結するのは、90年より2年ごとに福岡市で開催されている「ミュージアム・シティ・天神」が最初だと考えてよい。このプロジェクトでは、駅構内や百貨店の内部など、都市のいたるところが作品の展示スペースとなった。それらの多くは彫刻設置事業の対象にはなり得ない場所であったし、作品は恒久性を意識せずに済むため、これまでになく多様な表現が可能となった。その初期に、蔡國強（ツァイ・グォチャン：1957－）、柳幸典（やなぎゆきのり：1959－）、折元立身（おりもとたつみ・1946－）、松蔭浩之（まつかげひろゆき：1965－）、小沢剛（おざわつよし：1965－）、中村政人（なかむらまさと：1963－）など今日のアートシーンを考えるうえで重要なアーティストの参加があったことも見逃せない。

写真25●1993年に墨田区で開催された「両国－JR両国駅における試み」のひとこま。JR両国駅の使われていない廃虚のような駅舎内部が会場に。作品は加藤力

このプロジェクトは東京へ波及し、93年には東京都墨田区で「両国－JR両国駅における試み」が開催される（**写真25**）。さらに同年、東京都中央区で「ザ・ギンブラート」、94年には東京都新宿区で「新宿少年アート」が開催され、これらはアーティストによるゲリラ的な性質を持ち、それゆえ、何にも拘束されない自由な表現が可能となっただけでなく、アートプロジェクトがアーティストの発意によって実現可能であることを示した。94年に東京都杉並区の中学校で開催された「IZUMIWAKUプロジェクト」も、アーティストたちが主体となって開催したものだった。95年には、ワタリウム美術館の主催による「水の波紋展」（**写真26**）が東京・青山地区で大規模に開催されるなど、滑走し始めたアートプロジェクトは96年以降、社団法人企業メセナ協議会の支援対象となり、安定した資金的背景を得て離陸する。

90年代前半の段階では、作品の仮設展示が中心だったが、仮設であるがゆえに、パフォーマンスなどの身体表現や、映像作品の展示も可能となっていく。99年に広島の原爆ドーム周辺で行われた、映像作品を屋外投影する「パブリック・プロジェクション広島」は、都市空間での新たな表現手法を印象づけるものとなった。とりわけ映像表現については、その後の液晶プロジェクターやデジタルビデオの技術革新などにより、急激に発展することになる。

写真26●1995年に東京・青山地区でワタリウム美術館が主催した「水の波紋展」のひとこま。ヤン・フートが総合監督を務め、街路、公園、寺、商業店舗内などさまざまな場所が作品の展示場所になった。左よりホワン・ムニョス、ミロスワフ・バウカ、フェデリコ・フージ、エイヴリー・ブレイスマンの各作品

写真27［左上］●北川フラムのディレクションによる「大地の芸術祭－越後妻有トリエンナーレ2003」のひとこま。キム・ソラ／ギム・ホンソックの「ルーフトップ・ラウンジ」（十日町市）**写真28**［右］●香川県直島で2001年に開催された「スタンダード展」のひとこま。作品は中村政人の「QSC+mV」で、かつて牛舎として使用されていた建物の中に展示された。"The 'Golden Arches' symbol is used with the permission of McDonald's Corporation, 2001." **写真30**［左下］●大分市主催の「大分現代美術展2002アート循環系サイト」のひとこま。折元立身のパフォーマンス「ブレッドマン」の状況。顔にフランスパンを巻き付けた集団が街を練り歩く。通行人とのコミュニケーションが目的

左●2003年にオープンした山口市の山口情報芸術センターのオープニング記念として行われたアートプロジェクト、ラファエル・ロサノ＝ヘメルによる「アモーダル・サスペンション・飛びかう光のメッセージ」。夜空に投射される光はインターネットと連動していて、携帯電話などを使って見知らぬ人とコミュニケーションできるようになっていた　**右上**●1998年から毎年継続して行われているPHスタジオによる「船をつくる話2002－続ふねをつくる」の情景。場所は、広島県甲名奴郡総領町灰塚地区のダム建設予定地。ダムが完成すると、船は水に浮かび、山に移動する計画　**写真29**［右下］●アサヒ・アート・フェスティバル関連の「向島自転車アート＆ネット・プロジェクト」のひとこま。野上裕之の「輪タク・パフォーマンス」（2003年）。輪タクで乗客とアーティストがコミュニケーションする

さらには、地域を舞台に展開するアートプロジェクトならではの、アーティストと観客の交流を作品としてとらえるコミュニケーション型や、その進化形のアーティスト自身が観客や住民を巻き込み展開するプロジェクト型と呼ばれるタイプの作品が登場し、アートプロジェクトは活性化する。いずれも三十代前後の若いアーティストが開発した作品形態であり、「物」としての作品を介さずアーティストと観客が直接交流するところに特徴がある。99年から毎年、取手市の市街地を舞台に地元の東京芸術大学が主体となり開催されている「取手アートプロジェクト」は、まさにそうした新たな表現を試す実験場のような性質を持つ。こうして、アートプロジェクトは地域を舞台に急速に進化を遂げる。

アートプロジェクトの拡大

2000年から3年ごとに新潟県十日町市周辺の広大な農村を舞台に極めて大規模に展開する「大地の芸術祭－越後妻有トリエンナーレ」（**写真27**）や、2001年に香川県直

上●千葉大学は2000年より毎年アートプロジェクトを主催している。その一つ2003年の小沢剛による「いずみプロジェクト」のひとこま。農村で暮らす人々のアイデンティティを大きな写真看板として表現。1日だけの展示となった。作品名は「ベジタブル・ウエポン（千葉市若葉区富田町）」

左●福岡県田川市での「川俣正コールマイン田川 2003・サマーセミナー」。陶芸家の渡仁によるワークショップ「新聞窯で焼物を作ろう・窯焚き」。参加者がつくった粘土の作品を新聞紙でつくった登窯のような窯で焼く　**写真33**［右］●2002年に水戸市で開催された「カフェ・イン・水戸」のひとこま。須藤正樹によるパフォーマンス「梅じいといく日曜日」。老人の人形と街を散歩するというもの。通行人がぞろぞろついてくる

左●熊本県阿蘇での八谷和彦による「オープンスカイ」のひとこま、2003年。アニメ『風の谷のナウシカ』に登場したメーヴェのような一人乗りのパーソナルジェットグライダーの模型をつくり、飛行実験をする　**右**●兵庫県淡路島でのLOCOの「コップ人間」のパフォーマンス、2003年。小中学生の総合学習として行われた

左●大津市で行われた中ハシ克シゲによる「ゼロ プロジェクト 京都〜琵琶湖 #601-1XX.2003」のひとこま。写真を張り合わせてつくった零戦を意味のある場所と日時に燃やすプロジェクト　**写真31**［右］●千葉県のニュータウンで2002年に開催された「アートユニバーシアードーまちを豊かにする菜の花里美発見展」のひとこま。武蔵野美術大学の伊藤誠ゼミによる「凹心凸心」。空き地につくられた巨大なクレーター

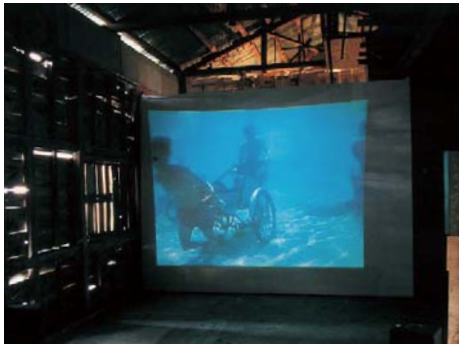


写真32［左］●2002年に東京都が主催した「トーキョー・アート・ジャングル」。山手線の車両一編成を使ったインスタレーション。写真は田中秀幸が担当した車両　**写真34**［中］●那覇市の市街地を舞台とする「ワナキオ」(2002)。市場の空きスペースでジュン・グエン・ハツシバの映像作品を上映　**写真35**［右］●仙台市での「観光とアート展ー TANABATA.org ART project 2003」。地下鉄車内でフライトアテンダントの格好で乗客に飲み物をサービスするタニシK。見知らぬ乗客同士のコミュニケーションを誘発する

島で開催された「スタンダード展」は、アートプロジェクトが地域に対して果たす役割を具体的に示すものとなった（**写真28**）。集客して地域に直接、経済的な恩恵をもたらすだけでなく、地域の人々に日常生活のなかで忘れがちな地域の魅力の再発見と、地域レベルのアイデンティティの再認識を迫る効果が明白になる。こうして、2000年以降、アートプロジェクトは地域に対して有益な効果を持つものと認識され、全国に波及し活性化する。ポスト冷戦構造といえる9.11構造のなかで、アーティストたちは、いかにして作品に具体的な社会性を育むかを模索するようになる。それが、彼らの存在意義に直結する問題に変化したからだ。

自治体あるいは企業が主催するもの、NPOやアーティストの主催を企業が協賛するものなど形態は多様だが、主なアートプロジェクトとして、民間による「アートリンク上野ー谷中」（東京）、千葉大学主催の「アートプロジェクト検見川送信所」（千葉市）、アサヒビール株式会社協賛による「アサヒ・アート・フェスティバル」（全国で展開）、大分市主催の「大分現代美術展2002 アート循環系サイト」、千葉県東部のニュータウンを舞台とする都市公団などによる「アートユニバーシアードーまちを豊かにする菜の花里美発見展」、東京都主催の「トーキョー・アート・ジャングル」、帯広市と地元企業の主催による「デメーテル」、水戸市の財団主催の「カフェ・イン・水戸」、NPOやアーティストによる「ワナキオ」（那覇市）、神戸市での「ネイチャーアートキャンプ」や「新開地アートプロジェクト」、アーティスト主導による「観光とアート展」（仙台市）、教育機関のイアマスによる「おおがきビエンナーレ」（大垣市）、大阪市での「ブレーカープロジェクト」などがある（**写真29〜35**）。

これらのアートプロジェクトは、現代社会で発生した新しいタイプの「祭」なのだと考えて、それほど間違ってはいないと思う。その特性として、既存の芸術のカテゴリーを逸脱するノンジャンル化、美術館制度など既存の制度とは無関係なオルタナティブな組織と場への依存、アートを媒介に人と人を結ぶネットワークとコミュニケーションの場を生成しつつ新たな社会的価値観と社会システムの構築を模索する姿勢、がある。

彫刻設置事業の創始者といえる土方定一は、宇部市の設置事業開始に先立ち、「野外彫刻展が戦後の新しい現象となっている。野外で彫刻を愉しむということばかりではない。20世紀の近代彫刻がアトリエの中の実験に従っているうちに忘れていた彫刻の社会性を回復しようとしていることが、つぎに大切なことだ。これは建築家、彫刻家、画家が協働して、われわれの生活空間を合理的に美しくしようということである」（1958年1月27日朝日新聞）と述べ、早くも今日の状況を予言している。土方は最初からすべてを見通していた。だが、さすがに土方も予想できなかったのは、アートプロジェクトの展開なのではなかろうか。今、街とアートの関係史は、土方を超えようとしている。

彫刻設置事業がハードに地域に挑んだのに対し、アートプロジェクトは、ソフトに地域に挑み始めている。ハードからソフトへの転換は、社会全体の流れでもある。まさに今、時代の転換期に、私たちは立っている。新しいパラダイムが始まった。 NE

アートで都市空間を彩る

art

南條史生

新進気鋭のアーティストに作品をつくらせ、一つの空間をつくりあげる。それも美術館という限られた場所ではなく、不特定多数の人々が行き交う公共の場に、だ。コンテクスト（周囲の状況、背景の事情）を踏まえた作品群により、その空間は以前とは違う、生き生きとした表情を見せる。新しい発想で都市空間にパブリックアートを取り入れた先駆者の一人、南條史生氏にお話をうかがった。

その場所のためだけのアート

私は、アートプロジェクトを手がけるとき、基本的にはヴェネツィアビエンナーレなど美術の国際展で評価された作家のところにまず行きます。そういった美術の世界で非常に高い成果を挙げている人のなかには実験的なことをしている人たちが多いこともあり、リスクも高いのですが、その人たちに場所の情報を与え、何をつくるかを聞き、形にしていくようにしています。プロップアートと呼ばれる、買ってきたものをぽんと置くということではなく、この場所にいちばんいいものは何かという発想で議論していき、その結果、その場所のためのアートをつくり演出することになります。

その方法で初めて手がけたのが「横浜金沢ハイテクセンタープロジェクト」でした。クライアントからは彫刻を置いてほしいといわれていましたが、すでに用意してあったランドスケープデザインがあまりに過剰だったため、彫刻が良く見えないということで、ここにアートは不要でしょうと伝えました。つまり、美術品を置くということは、床の間にものを飾ることと一緒なんだと。床の間には余計なものがなく、軸と花と壺が置いてあり、それらを見たときにすべてがすっきりと良く見えます。そういう話を関係者にしたら、最終的にはランドスケープデザインそのものをアーティストに任せることになりました。

都市にアートを持ち込む魅力

1995年には「新宿アイランドアート計画」という大きなプロジェクトを手がけました。ここでは60年代の美術史を代表するようなアーティストを起用しました。新宿はオフィス街で、近くに都庁があり「公の場」というイメージが強い場所です。採用した作品はダニエル・ビュラン、ロイ・リキテンスタイン、ロバート・インディアナなど、すごくメジャーなものがそろっています。

当時、東京都現代美術館もオープンしたばかりで、それらの作品を常時展示している美術館がなかったことから、現代美術の巨匠を一般の人たちの目に触れさせる場をつくってみようと考えました。しかもパブリックアートでも、ある観点からキュレーションできることを実証してみせたかったのです。

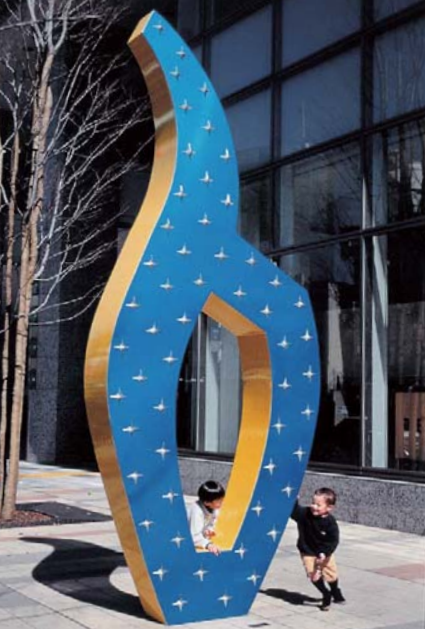
単純に買ってきて置くだけというのではなく、あるコンセプトに基づいて全体をパッケージ化する、それによってメッセージが発せられ、さらに啓蒙活動が起こる。そういう考え方を提案するつもりでやっていました。だから「ポップ」「ミニマリズム」「コンセプチュアル」という60年代の美術動向の代表的な作家が入り、その結果、新宿アイランドは小さな現代美術史を描くことになったと思います。

ゆめおおおか・アートプロジェクト

97年に手がけた、横浜、上大岡駅の「ゆめおおおか・アートプロジェクト」では、日本人を中心にアジアの若手アーティストでまとめています。上大岡駅は商業とまちの人たちの交差点ということを考えて、ポップで楽しい感じの、新宿アイランドとはまったく違った方向で進めました。一般の人は有名無名に関係なく、あまりアーティストを知りません。それよりも作品がその場所でどう見えるかが重要です。

PROFILE
森美術館副館長。1949年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部、文学部哲学科（美学美術史学専攻）卒業。国際交流基金等を経て2002年より現職。これまでヴェニスビエンナーレをはじめ、多くの国際展、国内外の展覧会企画者、パブリックアート計画のコンサルタント等として活動。AICA（国際美術評論家連盟）副会長、CIMAM（国際美術館会議）評議員。慶應義塾大学講師。

●横浜金沢ハイテクセンタープロジェクト
住友生命が事業主体となって建設した研究施設のための広場デザイン。西川勝人によるランドスケープデザインは、それ自体がアートになっている（写真：JIMBO）



●ゆめおおおか・アートプロジェクト
［右上］PH スタジオ「ルーフトップ・バッセージ」。屋上広場に上大岡の記憶を刻んだストリートファニチャーや遊具的なオブジェ 8 点を展開（写真：中川達彦）［左］吉水浩「Good Luck」。「グッド」を示す親指を立てたサインを表現。歩道に設け、道行く人の幸運を願う作品となっている ［下左］奈良美智「World is Yours」。駅ビル内の吹き抜けに吊るされたブランコに乗った女の子、ルーシー。立ち止まって見上げる小さな子どもの姿も見られる ［下右］村上隆「DOB 君、こんにちは」。愛嬌のある大きな顔を、上大岡駅のある横浜市港南区の花・ヒマワリをイメージさせる鮮やかな黄色で描いている（以上写真：ナカサアンドパートナーズ）

●博多リバレインアートプロジェクト
福岡市博多区で実施された再開発計画のためのアートプロジェクト。複合ビルの周辺、建物内部に「アジアガーデン」というコンセプトで、日本、韓国、中国、台湾などアジアの作家の作品を設置した
［上］西川勝人「Physalis ／ほおずき」［右］ホセイン・ゴルバ「花・永遠・快楽 アサディーと世阿弥へのオマージュ」（以上写真：井上一）

●新宿アイランドアート計画
新宿に建設された、オフィスをメイン機能とした複合ビルの周辺外構および建物内部に現代美術の作品を展開。建築を含むプロジェクト全体が 1996 年日本建築学会賞（業績）を受賞した。
［上］Robert Indiana「LOVE」［下］Roy Lichtenstein「Tokyo Brushstroke I」（以上写真：山本 糾）

ナンジョウアンドアソシエイツの主なパブリックアートプロジェクト（アドバイザーとして関わったものを含む）

1992 新横浜駅前公園換気塔外装アートプロジェクト（横浜）
1994 横浜金沢ハイテクセンタープロジェクト（横浜）
1995 新宿アイランドアート計画（東京）
1997 ゆめおおおか・アートプロジェクト（横浜）
　　溜池山王駅パブリックアートプロジェクト（東京）
1999 博多リバレインアートプロジェクト（福岡）
　　大林組本社ビルアートプロジェクト
2000 静岡文化芸術大学アート計画（静岡）
2002 中之島三井ビルディングアート計画（大阪）
2003 横浜アイランドアート計画（横浜）
　　山形カウントダウン・クロックアートプロジェクト（山形）
　　六本木 T-CUBE アートワーク計画（東京）
2004 日本橋一丁目ビルディング アート計画（東京）

ブランコに乗っている奈良美智（ならよしとも）の作品に関しては、人形の目つきが悪いとか、気持ち悪いなどといわれました。でも、それだから奈良の作品はいいわけで、それを捨てたらおもしろくない。ただ彼にしては珍しく黒目の部分が黄色だったので、不気味がって子どもが泣きだしてしまうといわれ、奈良と相談してグリーンに塗り直しました。

しかし、本当にみんなこの作品を嫌だと思っているかどうかが気になって、一週間かけてアンケートをとってみました。結果的に、否定的な意見はほとんどありませんでした。「気持ち悪いけどかわいい、怖いけどかわいい」という、今でいう「きもカワイイ」という感覚。そういうトレンドの最初に立っていた作品で、女子高校生などは非常におもしろがっていたことがわかりました。独特な雰囲気を持っているが、これだけおもしろいと思っている人たちがいるということをアンケートで立証して作品を残すことになったのです。それが今ではファンに盗まれるほどの騒ぎになっています。

また村上隆の作品に関しては、当時数百万円くらいだった価値が今では 1000 万円クラスになっています。お金がすべてではないけれども、若手を採用すると、何人かは非常に高い評価を得て、後で認知されるという楽しみもあります。

キュレーションされたアート計画

福岡の博多リバレインでは、中国人、タイ人、フィリピン人、韓国人などアジアの作家たちが、アジアの文化芸術の現状を表現しました。そして、人工的な街の中に、自然のイメージや言葉を展開しました。

「大林組本社ビルアートプロジェクト」は、オフィスアートです。毎日通ってくる 5000 人の社員がいることを考えるとパブリックな場所ともいえます。すぐに飽きてしまうようなものではいけません。そこで「光と速度」をテーマに、パステルカラー調で軽く、ほとんどを抽象的で、ガラスを多用して透明感を出し、センスのいい作品であるけれども主張の強過ぎない仕上がりにしました。

六本木ヒルズでは、「ママン」という蜘蛛の彫刻は結果的に目玉作品になりました。実は、社長の森氏が推薦した作品で、ちょっと不気味な雰囲気もあり最初は心配でしたが、大きくて目立ち、通行の邪魔にもならず、待ち合わせ場所のシンボルとしては理想的な作品でした。現場に目玉になる作品が一点あるかないかで印象が決定的に違ってきます。

人々を動かすシンボルをつくる

例えば、新宿アイランドに設置したインディアナの「LOVE」という作品は、60 年代のベトナム戦争のころのメッセージで、少々古いと思ったのですが、建築家がこの作品がいいというので入れました。すると、多くの写真家が作品の前で撮影するなど、思わぬ PR 効果がありました。

現在、アドバイスをしている大きなプロジェクトが、青森県のある町の「野外芸術文化ゾーン構想」で、町の真ん中に昔からある大通りをアート化しようというものです。このケースでは、これまでの建築や野外彫刻を建てるという考え方ではなくアートを使ったアクティヴィティへどうつなげていくかが重要だと思っています。全体をどうやっていくかはこれからですが、成功させるためには、国内外を問わず外から人が見に来るようなシンボリックで魅力的なものが必要だと考えています。

都市づくりは最大のものづくり

今日では文化を抜きにまちづくりはできません。それは日本に限らず、今や韓国、中国、台湾では当り前のようにパブリックアートが再開発のなかに入っています。都市開発は大変クリエイティブな仕事だと思います。しかもそれは「人間がこれから、いかに生きていくか」という大きなビジョンにつながっているのです。人間から出発し人間に戻るもの。都市づくりもアートも、人間のためのものだと考えています。人間から出発し人間に戻り、そうして出来上がったものが巨大な都市になるということを考えると非常におもしろいですね。可能であるならば、今後、建築や都市づくりに積極的にかかわってみたいと思っています。 NE

アートプロジェクトで社会の価値転換を迫る

art

北川フラム

2003年の夏、新潟の中山間地域、越後妻有（えちごつまり）で開催された「越後妻有アートトリエンナーレ——第2回大地の芸術祭」に訪れた人は、会期中の50日間で20万人を超え、その数は国の美術館で催される「現代美術展」の入場者数を一けたも上回った。全国から集まったボランティアやワークショップに参加した人は1万人を数え、新潟県内への経済波及効果はおよそ188億円で、第1回の1.48倍になるという。

景気低迷のなか、地方の村おこし事業も尻すぼみとなり、農山村はますます疲弊していく状況下で、新潟県と十日町圏域6市町村が連携で推進している「越後妻有アートネックレス整備構想」と呼ばれるこの試みは、地域住民との「協働」を通して地域振興を行なう新しいモデルとして高く評価されている。9年もの準備期間を費やし事業を牽引（けんいん）してきたのがアートプロデューサーの北川フラム氏だ。折しもインタビューを行った2004年5月には、東京・京橋にあるINAXギャラリーで彼の仕事と思想をめぐる「北川フラム展」が開催されていた。期間中行われた講話で語られた彼自身のプロフィールを紹介しながら、アートをめぐる数々の仕事を通して紡いできた北川氏の思いを語っていただいた。

北川氏は、新潟の高田市で貸本屋を営み、良寛研究でも有名な故・北川省一（せいいち）の長男として生まれる。父・省一は、良寛から学んだ生活信条を「貧道」と呼び、生涯の道標とした。作家の中野重治や椎名隣三らと交友を結び、復員後、農民・労働組合運動に専念。息子にノルウェー語で「前進」を意味する語「フラム」を名付ける。

そんな父親のもとに育ったフラム青年は18歳のとき新潟から上京。戦後の日本をめぐるさまざまな思想が学生運動の盛り上がりとともに交わされるなかで、谷川雁、埴谷雄高、吉本隆明らの文化運動に強く影響されながら新しいコミュニティのあり方を模索する。特に谷川雁の「工作者宣言」に感動し、「ぬえのような人間でなければ媒介者にはなれない」という谷川の言葉を胸に、東京芸術大学入学後、美術の抱える問題を明治以後の日本の問題ととらえるようになる。

そして昨年、故郷である新潟の中山間地域を舞台に取り組んだ「大地の芸術祭」を通して北川氏は「かつて媒介者としての覚悟を語った谷川雁の限界を悟り、妻有のプロジェクトがそれを超えると確信している」と語った。何かに突き動かされているような彼の活動力の根源は、常に時代の体現者だった父の生き様にあるのかもしれない。

PROFILE

株式会社アートフロントギャラリー、現代企画室代表。1946年新潟県高田市生まれ。東京芸術大学美術学部卒業後、1971年より現代美術のプロモーション活動を開始。ガウディ展、アパルトヘイト否！国際美術展などを企画し全国を巡回。1994年ファーレ立川のアート計画で日本都市計画学会計画設計賞受賞。

都市と農村の問題が表面化した現代

Q. 新潟の山間地域でこのようなアートイベントを展開する意図をお聞かせください。

北川——越後妻有地域は、夏は蒸し暑く冬は豪雪という米作りに適した気候で、1500年もの永きにわたり農業を生業（なりわい）としてきました。近代化の流れのなかで都市に労働力や情報が集積していく反面、中山間地域の人口は減り、文化もコミュニティも崩壊の危機にさらされています。具体的な数字でいえば、ある町では最大14000人だった人口が現在は4000人。20年後には1800人くらいになるといわれています。そうなれば、町そのものが守れなくなり、住んでいる人たちも社会から取り残されている感じになってしまう。厳しい自然を相手に生きてきた知恵とプライドがまったく意味のないものになってしまいます。いにしえのアジアに開かれていた時代、北前船が物流の大動脈だった時代、日本海側は「表」だったわけですから。そこを元気にするお手伝いをしたかった。

もう一つ、都市にもさまざまな問題が表面化しました。特に1994年、当時「神戸株式会社」と呼ばれ都市運営では全国の見本となっていた神戸市が阪神淡路大震災に見舞われ、都市の脆弱（ぜいじゃく）性を露呈した。そしてオウム真理教があの辺りを中心に広がり、日本列島を震撼（しんかん）させた神戸連続児童殺傷事件が起きる。さらに、都市に集約された利潤の余剰で地方を賄うという構図が崩れ、地方分権を国は言い出した。これからは都市と地方のゆがんだ分業体制を見直し、都市は地方を内に含み、地方も都市を内に含む「都市と地方の交感」を考えていかなければいけないと思ったのです。

長澤伸穂「透けてみえる眼」／十日町市南鐙坂。空家での設置。回転灯篭には地域の年長者と子供たちの顔が透けて重なる

古郡弘「盆景 -II」／十日町市下条の休耕田。土壁の製作に参加した人々の手形が残った

手塚貴晴＋手塚由比の設計による越後松之山「森の学校」キョロロ／松之山町

小沢剛「かまぼこ型倉庫プロジェクト」／松代町まつだい雪国農耕文化村センター「農舞台」内。豪雪地帯の近代史を物語る独特のアーチ屋根（かまぼこ屋根）の歴史を検証する作品

水内貴英「ミーツ」／十日町市鉢集落。ツリーハウスの茶室。作家が1年集落に滞在し、住民と共につくった茶碗でお茶を振舞った

新田和成「ホワイトプロジェクト」／川西町ナカゴグリーンパーク。地元の年配者が中心になって手縫いした約8000枚の布による平和へのメッセージ

クリスティアン・バスティアンス（オランダ）「越後妻有版・真実のリア王」／まつだい農舞台にて上演。地域の年配者出演によるリア王を元にした芝居の上演。舞台美術も作家による作品

ジャン＝ミッシェル・アルベローラ（フランス）「リトル・ユートピアン・ハウス」／松代町小屋丸集落。小さな集落に建てられた小屋の内部には「良く生きる」ための言葉を持つ壁画が展開された

ジャネット・ローレンス（オーストラリア）「エリクシール／不老不死の薬」／松之山町上湯集落。既存の蔵を利用した作品。内部は地域の植物を使った薬草酒を味わうことができる研究室のような構え

「越後妻有アートトリエンナーレ——第2回大地の芸術祭」より（写真：竹田直樹）

里山が都会人の五感を解放した

北川——2000年に引き続き開催された2003年の妻有のイベントに多くの人が集まりリピーターになりましたが、その理由は、なにより五感を通して大地とかかわれたことが大きかったと思います。山あり谷ありの地に散在する50カ所以上ものアートを見て歩くことは容易ではありません。しかし、訪れた人々にとって本当におもしろかったのは新潟独特の蒸し暑さと、風や草のにおい、そしてわれわれのDNAに刻み込まれた懐かしい里山であって、アートは道祖神に過ぎなかったかもしれません。

では、なぜアートだったのか。いくつかの理由があります。まず、アーティストは新しい視点でその場所の魅力を発見します。また、作品をつくるためにその土地の所有者を説得する努力をする。他人の土地にアーティストの勝手な夢想をつくるわけですから、その地域を知り、地域への共感が生まれない限り土地の住民を説得することはできません。そして実際につくり始めると、アーティストよりはるかにスキルフルな地元の人たちが技術を提供し、そこに「協働」が生まれる。それが中原佑介氏のいうところの「芸術発生の瞬間」であり、アートが地元のものとなる瞬間でもあります。

さらに、アートはそこに行かなければ伝わってこないものだからこそ、人を呼ぶ力がある。これが実際に妻有に人を呼んだ力だったのです。この経験から、人を結ぶコミュニケーションの手立てとしてアートにはまだ力があると実感しました。実際につくられた作品はなかなか見事なものが多く、その土地がつくらせていると思えた作品がたくさんあります。都市には五感を解放させるものがありません。アートを好き嫌いではなく、わかる、わからないという話にして

磯辺行久「信濃川はかつて現在より 25 メートル高い位置を流れていた - 天空に浮かぶ信濃の航跡」／中里村堀ノ内。信濃川沿いの地形や地質を調査するワークショップを実施し、河川の浸食によってできた崖に幅 100m の足場をかけ、マーキングによってそれぞれの時代の水位を再現した（写真：竹田直樹）

いる美術自体の問題もありますが、そういうことへの挑戦でもありました。

「協働」のおもしろさを伝えたい

Q. アートの世界は往々にして作品解説に終始し、受け手の話はあまり出てきません。妻有の場合は、たくさんの地元の人々を巻き込んでいますが、彼らはどんなかかわり方をし、どんな感想を持っているのでしょうか？

北川――このイベントは県と市町村の予算で行うため、議会の承認を得なければなりませんが、当初、「まちづくりになんでアートなんだ」と議会のほとんどの人が反対しました。しかし反対するということは重要なことです。そこから徐々に、過疎問題やまちづくりとは何かを、村の人もアーティストたちと一緒に考えていくことになった。これがいちばん重要なことです。

2003 年のイベントでは、土地の 4 割の人がおもしろいといってくれた。これは大変なことです。例えばイリヤ＆エミリア・カバコフの「棚田」という作品がありますが、ここの田んぼを提供してくれた方は途中でやめるつもりだった。だけどたくさんの人が見に来て感動してくれたことで、「俺が生きている間、ずっとやり続ける」と言ってくれたのです。農政が迷走している現在、農業は彼らにとってこれまでのように誇りを感じられるものではなくなってきている。作った米が誰かの元に届いて喜ばれているという実感を持つことが重要だということを、イベントを通じて地元の人たちが感じ始めたようです。松代には農耕文化村センター「農舞台」というのがあります。冬の間はほとんど誰も来ませんが、呼びかけたら 30 人くらいの人が集まり、この施設を拠点にして毎週木曜日、東京の代官山で松代の農産物を販売するような動きも出てきました。

また、イベントをサポートするボランティアの学生を中心とした「こへび隊」というのがあります。彼らは気ままな都会の若者たちですが、地域の人たちとかかわるなかでいろいろ変化していく。アートフェスティバルとは別に夏祭り、雪祭りなど地元の行事にも参加し、コミュニティの一員になりつつあります。彼らは思想・信条で動いているわけではありません。違う場所とつながり、異質な人々と「協働」するおもしろさを素直に実践しているのだと思います。地元の人たちも彼らと付き合ってみて、おもしろいことが起きているという実感は生まれています。今までは過疎が進行して夏祭りもできなくなっていたわけですからね。

Q. 北川さんはよく「協働」という言葉を使われますね。ご自身も学生のころからコンサートや芝居を開催し、「皆と協働しながら、ものづくりの裏方を好んでしてきた」と語っておられます。専門に勉強された仏教彫刻の世界についても「そこには職人による幸せな協働の世界があった」とするように、「協働」への思いが強いようですが……。

北川――人間というのは一人より、大勢で同じことをやるほうがずっと楽しいんじゃないかと思っているんです。個人だと才能だけの話で終わってしまいますが、チームプレイになると、そこには助け合いや工夫など、いろんな要素が出てくる。

［左］稲刈りに参加するこへび隊。2002 年秋　［右］アーティストグループ、フタボンコのワークショップに参加する北川氏。十日町市街地にて（以上写真提供：アートフロントギャラリー）

ガウディもそうです。彼は今でいうところの人気建築家で、裕福でもあった。しかしスポンサーを失い途方にくれるなかで、職人たちと「協働」できる世界があり、そこにこそ自分のやりがいがあることに気づくわけです。だからこそ、ときには喜捨を乞い、解体した建物の廃材をもらいながら少しずつ造っていくことができた。それがテクスチャーにも現れていますね。そういう工夫のなかから出てくるおもしろさが「協働」なのです。実際、ガウディの造形と世界観は日本の建築界に大きな影響を与えました。

妻有での「盆景―Ⅱ」と題された古郡（ふるごおり）弘氏の巨大な土壁についている手形は、参加した人たちの誇りと喜びだと思っています。共同作業はローテクにならざるを得ませんが、ローテクというのは身体感覚ですからね。僕はメディア・アートがあまり好きじゃありません。意識が覚醒するというのはあるかもしれないけど、五感が解放されていくという感動に乏しいのでつらくなるのです。

無垢な心でアートを楽しむ公共空間をつくる

Q. 越後妻有アートフェスティバルに先駆け、街なかにパブリックアートを大胆に投入したプロジェクトとして 94 年完成の「ファーレ立川」がありますね。このときは都市景観大賞などさまざまな賞を受賞されましたが、ここで北川さんがやろうとしたことはなんでしょうか？

北川――ファーレ立川は 91 年のコンペでした。調査のために街を歩いてみるとちっともおもしろくなかった。建築のほうはすでに設計が終わっていたので、そこは手をつけられない。ならば歩道や排気塔など建築家があまり興味を持たないところにアートを入れようと考えました。そして日ごろ現代美術に関心のない人たちにも喜んでもらえるものをと思ったのです。「触ってください、座ってください」をテーマとしました。ファーレ立川でアートに触ってきた子供たちは、美術館に行っても触りたがるので職員は困った、という話を聞かされましたが、立体物はそれでいいと思っています。

僕らは建築界や美術界に半分足が引っかかっています。すると彼らの評価が気になってしまう。それにとらわれることは非常に危険です。子供がおもしろがるもののほうが絶対いい、と思わないと、間違った方向にいってしまう。少なくとも建築には資本の論理と機能という絶対の条件がありますが、美術にはそういう条件が極めて乏しい。理屈でつくりあげるしかない。そのときの拠（よ）るべきものというのは五感を通してのおもしろさなわけで、それは子供のほうが断然正直だと思っています。

以前「アバルトヘイト否！国際美術展」というイベントを企画しました。南アフリカの人種隔離政策に反対する作家たちが、これまでにつくった自分の作品を出展することでアバルトヘイトへの反対を訴えるという展覧会でした。12m もある大きなトラックに 154 点の作品を積み、日本全国を巡りました。興行師のような気分で町に入ってサーカスのように展覧会を開きたいと思ったのです。ある町でのことですが、長谷川潔の版画を見て小さな子供が「こんな黒はみたことない！」と言うのです。長谷川の銅版画は、その深い黒で有名でしたが、そんなことを知らない子供が素直に感動の言葉を漏らす。子供は本当にすごいと思いました。最終的には全国の 194 カ所を巡業し、入場者は延べ 38 万人を数えました。そのとき以来「専門家より子供が喜ぶものをつくる」というところにいつも立ち返るようにしています。

アートプロジェクトを通して社会の価値転換を迫る

Q. 最後に、アートプロデューサーの仕事とは？ またその魅力を教えてください。

北川――アートというのは人と場所、人と人をつなぐ媒体だと思っています。また公と私を越えてつながっていく。アートの役割はそれに尽きます。

妻有でも他人の土地にものをつくるわけですから、他者と他者が出会うことが、私有制を越えていく。そのときに「公共」という日本に最も欠けているものが起き始める。美術は極めて個人的で生理的なものです。そして人間の生理というのはつながっている。美の感じ取り方にも「類の共根」があると信じています。お祭りのようにみんなでがんばってやったときにつながる瞬間というのがある。そういう出来事は必ず人を引きつけていきます。

僕が裏方が好きな理由は、演奏しているピアニストとそれに熱い視線を送っている観客の両方を見ることができるからです。それが僕にとってのプロデューサーの醍醐味ですね。それと「協働」の魅力。そういう裏方の魅力をもっと知ってもらいたいと思っています。アメリカではコミュニティデザインという教育があり、フランスではメディエーターという、地域振興に無償で参加する制度があります。そうした動きを横目で見ながら妻有で、そして日本で、いろいろ挑戦していきたいと思っています。次の大地の芸術祭は 2006 年です。ご期待下さい。 NE

ベルリンを壁が隔てていたころ、東西の境界にあった検問所の一つがチェックポイント・チャーリーだ。東西ベルリンの分岐点として世界の注目を浴びた。現在はベルリンの壁博物館が併設されている。ベルリン生まれの写真家フランク・ティールは、アメリカ兵とソ連兵のポートレートがそれぞれ両面に配置する作品をストリートにインスタレーション*している。ベッヒャー夫妻の系譜を思わせるコンセプチュアル・フォトだが、それを見たすべての人々に、この地との関連と、不可解な「恐れ」を想起させる優れた作品だ。

また、ベルリンの壁の画家として著名なティエリー・ノワールが旧東を象徴する車、トラバントにペイントを施した作品を路上駐車させているのがユニークだ。博物館館長であったライナー・ヒルデブラントのメッセージ「ロールス・ロイスが英国の未来を担ったように、トラビィもまた、DDRの過去を象徴している」が記されている。

* Installation：作品とその環境を総体として観客に呈示すること

チェックポイント・チャーリー —東西ドイツ分岐点—

ポツダム広場 —ベルリンの壁跡地—

東西ドイツ統一後、ボンからベルリンへの首都移転に伴い、壁跡地が再開発されることになった。「ポツダム・プラッツ・プロヘクト」は世界有数の建築家150人ほどが参加し、300あまりの建設が進められている、欧州でも戦後最大規模の都市再開発だ。ポツダム広場はかつてベルリンの「黄金の20年代」に、世界で最も交通量の多い場所だったが、ナチスの主要施設に近いことから激しい空爆を受け、廃墟となっていた。映画『ベルリン 天使の詩』で「ポツダム広場が見つからない」という老人の嘆きは、半世紀を経て癒されることとなった。導入路ともいえるベンツ社エリアとソニーセンターの入り口に、ベルリンの壁の一部が常設された。路面には、すでに消失したベルリンの壁の跡が描かれたランドマークが記されている。新興高層建築群の入り口にあるこの眼下のラインに、通りかかる人のほとんどが目を留め、腰を下ろし、立ち止まり、見つめてゆく。

アートシティ・ベルリン

文・写真…… シヲバラ タク

art

「パブリックアート」とは、都市と人の身体感覚や記憶を呼び覚まし、それらを再開発・創造する契機を与えるものではないだろうか。都市開発とは同時に人の身体感覚に影響を与え、相互に生成変化していくことであり、そこでアートはダイレクトなツールとなる力を持つ。ベルリンでは特にそのこと強く感じる。「ベルリンでおもしろいアートは何ですか？」とよく聞かれるが、「ベルリンは都市そのものがアートです」と答えている。創造と破壊の連鎖と分断というアートのキーワードを、これほど具体的に生きている都市はほかにない。すべての事象が過去から経緯する「現在」として、無関係には存在できない街なのだ。ワイマール共和国の時代からナチス第三帝国DDR（東ドイツ）、統一ドイツと激変するなかで、ベルリンの再開発はその場所の「記憶の痕跡」というべき事象が繰り返し検証されてきた。

アートが国境を超えたネット時代の共時性のなかで語られるなら、そうしたベルリンを取り巻くテーマは抹香臭いアナクロニズムかもしれない。資本主義が発達し、国家という主体の解体・拡散のなかで、空間や時間への立脚点は変容していく。しかし現在の帝国主義リバイバルの見せる眼前の殺戮（さつりく）は、隠された代償を再び気づかせてくれる。ベルリン市民の反応はそこに敏感である。20世紀の間「被害」と「加害」を同時に生きた街は、いまだ都市の存在証明を、その歴史の分断と連鎖のなかで問い続ける必要が残されている。

また、建築都市ベルリンにあってはアートという言葉は境界を持たない。アートは個的なオブジェや建築の副次的な産物ではなく、プロジェクト全体の文脈の形勢に位置づけられてゆく。ダニエル・リベスキントのユダヤ博物館が、建築としてのパースペクティブというよりはヴァニシングポイント（消失点）を描き出しているように、建築にも「壁」はない。

ここではそうした広義な「パブリックアート」を紹介したい。それぞれが、都市の記憶を蘇生し、過去の問題を現在形としてリアルに想起、思考させるツールとして機能している。過去の史実は学べても体験はできないが、アートによって個々の想像力とともに、そのイメージを再び生きることができる。その問いかけから、過去を踏まえた未来の都市創造をベルリンは希求している。 NE

B E R L I N

テロのトポグラフィー —第三帝国の残像—

アルブレヒト王子通り（現在のニーダーキルヒナー通り）には、かつてナチスのゲシュタポ（秘密国家警察）、SS（親衛隊）、帝国公安局などの本部が置かれていた。その牢獄や地下室跡が発掘され、再開発の問題が浮上。そこでナチスの「犯罪」に焦点を当てたエキシビション「テロのトポグラフィー」が開催された。地下の壁面には、ナチスの組織構成やユダヤ人絶滅政策などが写真でインスタレーションされている。誰でも自由に見学することができるオープンエアだ。

この展覧会はテロのトポグラフィー財団によって企画・運営され、当初は３カ月の予定が多くの注目と反響を呼び、会期は延長されてゆく。そしてこの地に、ナチスの歴史をインフォーメーションする、建築家ピーター・ズントーによる「ドキュメンタリーセンター」の建設へと発展してゆく。封印されかねない過去についてオープンに語り合おうという機運をこの展示はもたらした、と財団員は語る。

白い図書室 —焚書へのレクイエム—

ブランデンブルク門からウンター・デン・リンデンを東へ向かうと、ルストガルテン（王宮広場）の手前にオペラ座がある。隣接するベーベル広場では 1933 年５月のナチス政権下、「非ドイツ的」とされるユダヤ系の書物約２万冊を火に投ずる焚書（ふんしょ）が行われていた。国民啓蒙宣伝大臣ゲッベルスの演説の傍らで、エーリッヒ・ケストナーは自著が焼かれる光景を見つめていた。

この地にその記憶を留めるため、イスラエルのアーティスト、ミシャ・ウルマンによって「地下の図書室」がつくられた。地面の約 1m² の四角いガラス窓から中をのぞくと、一冊の本も入っていない白い書棚が静かに地下へと続いてゆく。夕暮れ時からは内部の光が次第に外部へと拡散してゆく。焚書には皮肉にも「書を焼くものは、己を焼くであろう」という一節を持つハインリッヒ・ハイネの詩集も含まれていた。意外にも焚書はベルリンばかりでなくドイツ全土で行われた。ナチス学生同盟によって組織的に計画されたのだ。

ユダヤ博物館 —ホロコーストの塔—

建築家ダニエル・リベスキンドによるユダヤ博物館には入り口もなく出口もない。旧ユダヤ博物館と地下の通路で連結されているのだ。中心となるホールはなく、錯綜する「線」の中を身体は回遊し続ける。その過程でヴォイド（空虚・虚無）と遭遇する。建築そのものがユダヤの歴史を体現し、また表象する構造なのだ。そして地下の鉄の重い扉を開けると、高い天井から差す一筋の光以外、何もない空間に投げ出される。ここは「ホロコーストの塔」と呼ばれている。

また亡命と移住をテーマとした「E.T.A. ホフマンの庭」は、49 本の列柱が並ぶスクエアなガーデンである。上部にはオリーブの木が植えられ、12 度に傾斜している。49 本のうち 48 本はベルリンの土が使われているが、最後のひとつはエルサレムの土を使い、ベルリンを象徴している。土地を追われたユダヤ人が亡命の地に根づく希望を表現する。ベルリンに在住していた E.T.A. ホフマンは、リベスキンドの敬愛する詩人だ。

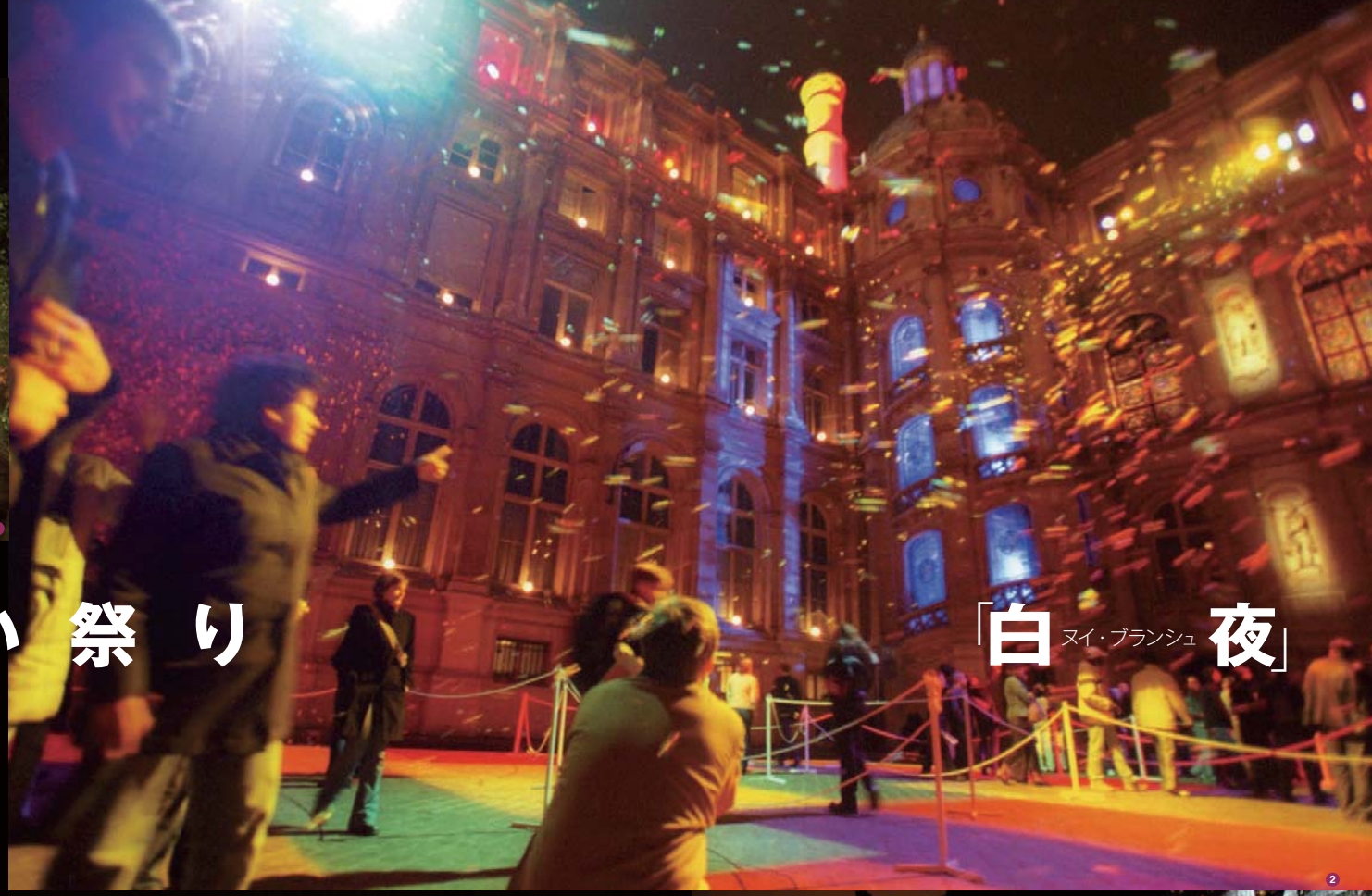
クンストラーハイム・ルイーゼ —アートのあるホテル—

再開発の進む旧東地区で 19 世紀の建築がリニューアルされた。「クンストラーハイム・ルイーゼ」は、一人のアーティストが一部屋をインテリアも含めて自由にインスタレーションしているアートホテルで、50 人近いアーティストが参加している。バナナが飛び交う部屋や、カラフルな長靴が壁面に張りついている部屋など多彩だ。ゲストは部屋を見て好みのタイプを選択できる。

なかでも、ベルリンのアーティスト、エルヴィラ・バッハによる「ブラック、ホワイト、レッド」の部屋は人気が高い。３人の女性の後ろはバスルームだ。一般にこうしたアートホテルは高価だが、ルイーゼでは 100 ユーロ前後から宿泊できる。

ベルリンにはほかにもこうしたアートホテルが数多くある。歴史的建築エルメラーハウスをリノベーションし、ゲオルグ・バーゼリッツの作品を中心に構成した「アートホテル・ベルリン」もお勧めだ。

B E R L I N



パリの新しい祭り

「白夜」ヌイ・ブランシュ

——ドラノエ市長の試み

文……岡井有佳

左派であるベルトラン・ドラノエ（Bertrand DELANOE）がパリ市長に就任した2001年3月以来、パリ市ではさまざまな変化が起こっている。バスの定時運行を実施するためのバス・タクシー専用路線の整備、クリーンなイメージを与えるための犬の排泄物処理の徹底など、市民生活を快適にする政策のほか、さまざまなイベントも行われている。その一つに、Nuit Blanche（ヌイ・ブランシュ。「nuit」は夜、「blanche」は白の意味）、「白夜」がある。

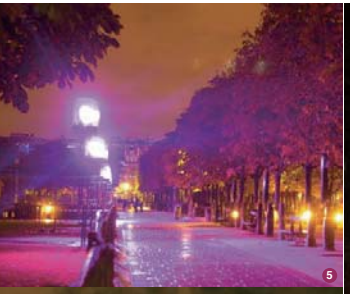
「白夜」は、「普段は芸術に触れる機会の少ない人も含めて、すべての人に芸術に触れてもらいたい」というドラノエ市長の想いから企画されたアートイベントで、10月上旬の土曜の夜から日曜の朝にかけて、パリ中のモニュメントを使って街全体を現代アートの作品に仕立てあげるという試みである。

2002年に行われた第1回は、パリ市庁舎などの建物がライトアップされ、国立図書館の壁面を大画面として映像が映し出された以外は、区役所などで古い映画が無料で上映されたり、ルーブル美術館やエッフェル塔、カタコンベ（昔の墓場）といった通常の観光施設やプールなど市の施設が朝まで無料で開放されるといった内容で、アートイベントというよりはむしろパリの夜を満喫するためのイベントという要素が強かった。にもかかわらず、当初の予想よりも大勢の人がパリの夜に繰り出し、どの施設も長蛇の列となった。2、3時間待つことは当たり前で、どこにも入れなかった人も多かっ

art

NUIT BLANCHE　A PARIS　SAMEDI 4 OCTOBRE 2003

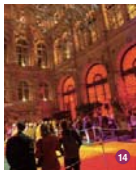
P A R I S



❶サンマルタン運河のライトアップ ©Sophie ROBICHON／Mairie de Paris ❷パリ市庁舎中庭のライトアップ ©Sophie ROBICHON／Mairie de Paris ❸ポンヌフ門のライトアップ ©Sophie ROBICHON／Mairie de Paris ❹田原桂一による証券取引所の演出 ©Harumi TOMIBAYASHI ❺レ・アールの愛の庭 ©Sophie ROBICHON／Mairie de Paris ❻❽国立図書館の風船の演出 ©Arnaud TERRIER／Mairie de Paris ❼パリ市庁舎外観の演出 ©Arnaud TERRIER／Mairie de Paris ❾開放されたパリ市営プール ©Sophie ROBICHON／Mairie de Paris ❿開放されたパリ市営プール ©Roxane NEVEU／Mairie de Paris ⓫フランス大通りのイベント ©Arnaud TERRIER／Mairie de Paris ⓬レ・アール ©Sophie ROBICHON／Mairie de Paris ⓭プールデル美術館 ©Roxane NEVEU／Mairie de Paris ⓮パリ市庁舎中庭 ©Sophie ROBICHON／Mairie de Paris

た。その反省から、2003年はより多くの人が楽しめるように、オープンな広い場所で開催することが試みられるとともに、企画内容もより芸術的なものとなった。

今回紹介する第２回の「白夜」は、2003年10月４日の夜８時から５日の朝７時にわたり、パリ市を６つの地区、①右岸中央地区、②左岸中央地区、③東地区、④西地区、⑤北地区、⑥南地区に分け、総計101カ所で催された。そして今回は６人のアーティスト、アミ・バラク（Ami BARAK）、ピエール・ボンジョヴァンニィ（Pierre BONGIOVANNI）、カミーユ・モリノー（Camille MORINEAU）、スザンヌ・パジェ（Suzanne PAGE）、ロバート・フレック（Robert FLECK）、ジェラール・バケ（Gerard PAQUET）によって各地区のイベントをコーディネートしてもらう方法が採られた。



右岸中央地区においては、パリ市庁舎がジルベール・モアティ（Gilbert MOITY）によって見事にライトアップされ、市庁舎内ではワインなどの飲み物や生ハムなどを準備して人々の来訪を歓迎していた。パリ市信用金庫ではミッシェル・ヴェルジュ（Michel VERJUX）によって７つのプロジェクターを用いた光の映像が映し出された。また、証券取引所では日本人写真家の田原桂一による光を使った演出が行われて、多くの人を惹きつけていた。

左岸中央地区においては、アンジュ・レチア（Ange LECCIA）がオーストリッツ陸橋を使って幻想的な光の演出を試みた。東地区にある国立図書館では、ジャン・コップ（Jan KOPP）がヘリウムでふくらませた直径7mの風船を用いて光の演出をし、ジェイムス・タレル（James TURRELL）は、現在開発中の「左岸（Rive Gauche）」に建設されたCDC（預金供託金庫）新社屋のガラスの壁面を利用し、光のイルミネーションを実現させた。

西地区の近代美術館においては、ベルトラン・ラヴィエ（Bertrand LAVIER）が香水を用いた「におい」のパフォーマンスを行った。ダグラス・ゴードン（Douglas GORDON）は近代美術館に至る経路のあちこちに「声明（Statement）」というタイトルで「この言葉を読んだ瞬間から、あなたが緑色の目をした誰かに出会うまで」という文を書き込み、思考よりはむしろ想像を誘発することを試みた。

そのほか、エッフェル塔など各種モニュメントはいうまでもなく、サンマルタン運河に至るまでライトアップされた。ルーブル美術館ではスペクタクルが行われ、劇場では芝居を上演、コンサートホールはもちろん、音楽大学、区役所、教会など至るところでコンサートが開かれた。さらにギャラリー、デパート、本屋などでは各種展示が行われるなど、どこも大勢の人でにぎわった。

パリ市庁舎前広場には、1800m² のテントを張り、プログラムや見どころを案内するインフォメーションセンターが設置された。そこでは、飲み物とともに、日曜の朝には、パン職人会議所からクロワッサンなど２万個のパンが配られ、一晩中イベントを楽しんでおなかをすかせた人々の胃袋を満足させていた。

協賛企業の協力も、これらのイベントを支えるために欠かせなかった。フランステレコムは自転車で夜のパリを散策するガイドツアーを企画、パリ市交通営団（RATP）は無償で自転車を貸し出した。また土曜の夜８時から日曜の朝８時まで、パリ市内の自宅からフランス本土への電話料金が無料になったほか、携帯電話用のプリペイドカードも無料配布された。

夏の１カ月間、バカンスに行けなかった人にもリゾート気分を味わってもらおうと、セーヌ川に砂浜を出現させる「パリの砂浜（Paris Plage）」というイベントも行っており、こちらも、パリっ子だけでなく旅行者をも惹きつけるイベントとなっている

公共交通機関についても、メトロやバスの一部を夜じゅう運行。さらに各主要会場間を結ぶ無料のナイトバスを走らせ、パリっ子の足を確保していた。

このように100万人を超える参加で大盛況のうちに終わった「白夜」は、パリだけでなくブリュッセルやローマにも波及し、この年に同様のイベントが開催されている。次第にヨーロッパ規模のイベントになりつつある「白夜」が、今後どのように発展していくか非常に楽しみである。 NE

2003年アートイベント「白夜」の公式カタログ

NUIT BLANCHE A PARIS SAMEDI 4 OCTOBRE 2003

P A R I S

がんばる自治体の
まちづくり奮闘記

❷ 岩手県西磐井郡平泉町

子孫に誇れる町をつくろう！

世界遺産登録を目指し 新たなまちづくりに挑戦する

文……山家一男
写真……石井雅義

平泉町は岩手県南部に位置し、人口約 9000 人の小さな町である。

一方で、平安時代に奥州藤原氏がこの地を治め、その後四代 100 年にわたり、当時の都であった京都と並び称される最先端文化が花開いた地として有名である。

源義経の終焉の地としても知られ、中尊寺、毛越寺など文化遺産も多く残されていて、減少傾向にあるとはいえ、平泉町には年間に 170 万人もの観光客が訪れる。

そんななか、平泉の文化遺産がユネスコの「世界遺産」暫定リストに登載され、2008 年の登録を目指して景観整備、受け入れ体制など各事業が大きく動きだしている。

地域行政と世界遺産登録との間で揺れ動く町民。

その道のりは、町民が生まれ育った地を見つめ直す絶好のチャンスでもあった。

高舘にある松尾芭蕉の有名な句碑。
「夏草や　兵どもが　夢の跡」
この地からの眺めに涙して詠んだ

束稲山から望む平泉町。中央に流れるのが北上川。対岸には、源義経が没したという高舘。その奥には中尊寺などが点在する

まちづくりの最大のチャンス到来 しかし、そこには乗り越えるべき壁があった

岩手県南部を貫く日本第５位の大河、北上川。その両岸に岩手県平泉町は位置する。義経、中尊寺だけでなく、松尾芭蕉、西行が有名な句を詠んだ地としても名高い平泉町。現地に降り立ち、再開発が進んだ駅前を過ぎると、なんとも美しい日本の田園風景が広がる。田んぼの畦には菖蒲の花が咲き、束稲山の麓にはツツジの花が満開である。花に溢れた風景には、平泉の浄土景観という文化遺産が大いに関係していた。

平泉の文化遺産がユネスコの世界遺産暫定リストに登載されたのは 2001 年のことだった。これまで減少の一途をたどっていた観光客や寂れつつある商店街を抱える平泉町にとって、それはまさに願ってもないチャンスの到来である。世界遺産登録に向けた新たなまちづくりに町民は活気づいた。

しかし、そこにはクリアしなければならない多くの問題が待ち構えていた。「世界遺産登録への最大の条件となるのは、未来にわたって世界遺産の景観を維持できる環境整備」が問われる。

「世界遺産となれば、住民の生活に多くの負担がかかることになる。そのコンセンサスが最も心苦しく、大変な問題だった」と千葉和男町長は語る。世界遺産に登録されると、直接指定対象となる文化遺産を厳格に保護するためのコアゾーンと、その周辺に設けられる利用制限区域となるバッファゾーンが指定される。特にコアゾーンに指定された地区では、史跡を維持管理していくために大きな制限が加えられるのだ。

1 発掘作業が続く無量光院跡 2 義経堂 3 柳之御所遺跡

コアゾーン確定への住民の理解 意外な展開を見せた景観条例

なかでも、藤原秀衡が平和の理念で造営した無量光院跡のコアゾーン追加の住民コンセンサスが問題だった。2000 年 12 月の世界文化遺産登録指導委員会で、専門家から追加指定の必要性が指摘されたことを受けて町が取り組んできたものだ。

ほかのコアゾーンとの最大の違いは、追加指定地内に多くの住宅が集中していたことだ。史跡のためとはいえ、そこで暮らす住民に大きな負担を強いることになる。発掘調査も必要で、その後は柳之御所遺跡を合わせた一帯を史跡公園として整備していく予定だ。世界遺産登録までに、観光客の導線の基点となるバイパス沿いの「道の駅」と一体化した施設の整備も急がなければならない。

史跡公園の中に住居を構える大変さは想像以上のものである。また、ほかの住民の要望として、北上川堤防工事と一体となったバイパスの建設に反対する声もあがった。遺跡の発掘・復元はいいが、平泉の誇る北上川を望む景観を壊したくないという地元へのこだわりがあった。北上川は荒れる河川だ。これまでにも多くの水害をもたらしている。それでもなお、自然のままに残したいという要望が強いのは、高館からの眺望を愛してやまない町民が多いからである。

無量光院跡の遺跡全体を史跡指定して守るという重要性は、長い時間をかけ住民に理解してもらった。堤防・バイパス工事は、バイパスを堤防内側の低いゾーンの、できるだけ景観を邪魔しない位置に設定し、堤防の緑化を行って現状にできるだけ近い形に戻すことで町民のコンセンサスを得ることができた。最終的なコアゾーンの確定に向けて、無量光院跡周辺は 2004 年５月、文化審議会で史跡の追加指定の答申を受け、世界遺産登録に向けて大きな壁を乗り越えることができたのである。

また、景観保護のため、平泉町では全国に類を見ないほどの厳しい景観条例が制定されている。住民と町役場が何度も話し合いの場を持ち、取り決めたものだ。

もう一つの問題と思われていたこの条例は、思わぬ展開を見せた。「意外だったのは、住民のほうがより厳しい条件を持ち出してきて、むしろ行政側がブレーキをかける場面が多く見られたこと」と平泉町役場総務課課長補佐の高橋誠さんは語る。「世界遺産のためにするのではなく、自分たちの子孫に対して、誇れる景観を残しておくためにするべきこと」という住民の強い願いが感じられたという。最も厳しい地区では、建物の最大高が 10 m。屋根の勾配や植栽の最低面積基準まで設けられている。

小さな町に降ってわいたような世界遺産の話は、まちづくりを加速させた。箱物が重点に語られ、町をいかに変えていくかが論点となりがちな再開発のなかで、平泉ではむしろ何を守るべきか、最小限変えていいものは何かに論点が集中していった。

CG で再現された無量光院の当時の姿。総務省が進める地域情報化モデル事業（e まちづくり事業）として認定され、多くの専門家が加わり「都市平泉」CG 復元事業が行われた

「道の駅」建設で 史跡ポイントだけでなく平泉全体を ゾーンで楽しんでもらえる町に

「観光地として見た場合、平泉の最大の問題点は、国道４号線のラインに沿った通過型の観光ポイントになってしまったこと」と高橋さんは指摘する。

かつては観光客が JR を利用して平泉に滞在していた形から、観光バスによるバックツアーに組み込まれ、中尊寺・毛越寺だけを短時間で見て、足早に町外の温泉宿に向かう現在のスタイルに大きく変化をしていたのだ。事実、JR 駅前や史跡近隣周辺では人込みを見ることはなかったが、中尊寺にたどり着くと、バスガイドに連れられた多くの人々と出会うことができる。

「少しでも観光客の滞在時間を多くするためには、観光ポイントをラインからゾーンに広げる必要がある。無量光院の史跡公園とバイパス建造による『道の駅』の新設はトライアングルゾーンを形成するための最高の施設になる」と高橋さんは語る。「道の駅」から毛越寺、中尊寺まで、それぞれ歩いて 20 分ほど。散策にはもってこいの距離である。さらに、各史跡周辺の豊かな自然環境も楽しんでもらおうと「ウォーキング・トレイル」も設けた。観光客の周辺散策と町民のレクリエーションの双方に利用できる施設である。将来的にはコアゾーンへの車の進入も制限し「パーク・アンド・ライド」ゾーンを設定して、ゾーン全体を散策する形にまで持っていきたいと、町のマスタープランでは未来像を描いている。

平泉の求心力となっているのは 争いごとを嫌い、世界平和を願う 極楽浄土の思想

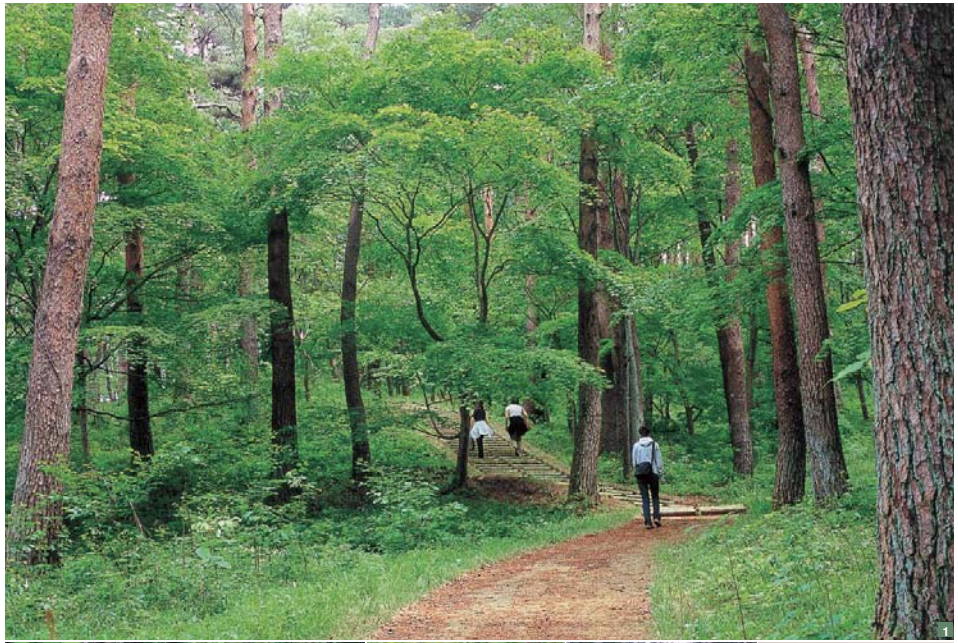
平泉町役場世界遺産推進室長補佐の八重樫忠郎さんは、この地独自の風土について「平泉はそもそも地の利と気候に恵まれた豊かな町だった」と話を始めた。奥大道の陸上交通、太平洋海運、北上川水運の発達と相まって発展してきた。北奥羽は金、馬など中央が珍重する物資の産地。北日本の交通の要衝であり、北上川のもたらす肥沃な大地が豊かな農産物をもたらしてきた。そのため「奥州藤原文化は栄華を極めたが、藤原氏亡き後は、争い事をしてまで暮らしを支える必要はなかった。後には２つの寺院と、のんびりとした風土、人を押しのけない人柄だけが残り、そのまま現代に至った」のだという。

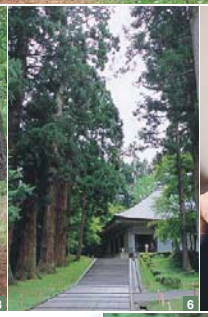
景観を変えたくないという住民の強い意識も、これまで守り通してきたものへの愛着があるからだ。

京都はその後も繁栄を続け、スクラップ・アンド・ビルドを繰り返してきたため、当時の姿を残すものは少ないが、平泉にはまだ数多くの遺跡がそのまま眠っている。その発掘の指揮を執り、世界遺産登録に向け中心となって動いているのが八重樫さんだ。

「30cm も掘り起こせば、800 年前のかわらけが山のように出てくる。それほど、この地の遺跡はなんの手も加えられることなく、すぐそこに埋もれたままなのです」と考古学出身の八重樫さんは、心から楽しそうに話してくれた。

発掘を開始した当時は、人の土地を勝手





1 2 3 中尊寺と毛越寺を新たなラインで結ぶ自然豊かな遊歩道「ウォーキング・トレイル」。国土交通省、警察庁、平泉町の三者が一体となって推進する事業となった。自然景観を残しながらステップや手すりを設けたことで、歩行者にやさしい道となっている 4 平泉町役場世界遺産推進室長補佐の八重樫忠郎さん。手にしているのは発掘した「かわらけ」。最近はスーツ姿でいることも多くなったが、この作業着姿がいちばん落ち着くと語る。世界に通用する奥州平泉文化の重要性を住民に伝え、自信を掘り起こした 5 建設が進む北上川の堤防とバイパス、道の駅。地域住民と行政が共同で運用する「道の駅」は、国土交通省の提唱で 1999 年からスタートしたもの。ドライバーの休憩の場としてだけでなく、名産品や観光情報など地域情報発信の場としても期待されている 6 中尊寺金色堂の覆堂 7「古都ひらいずみガイドの会」事務局長の関宮治良さん 8「ウォーキング・トレイル」で出会った一関のガイドたち。話すほどに、笑顔がこぼれてくる。ボランティアガイドは、地域を超えた取り組みとなっている

毛越寺で５月の第４日曜日に行われる「曲水の宴」。平安時代そのままの庭園と衣裳が、当時を偲ばせる（写真提供：平泉町）

にいじるなという苦情も多かった。しかし、奥州平泉文化の本来の意味を知るうち、住民の協力も得やすくなった。また、発掘作業をする住民たちの意識も変わってきたという。

金色堂だけが印象に残る奥州平泉文化だが、その独自性は、藤原初代清衡（きよひら）が残した「中尊寺建立供養願文」の一文「戦争のない仏国土の建設」にあると力説する。供養願文の思想を表現した浄土庭園を生かすまちづくりを清衡は提唱してきた。「京都は覇権の文化だったのに対し、平泉は平和や祈りの文化を求めた。ユネスコが世界遺産の暫定リストに載せることを決定した理由は、争いのない極楽浄土を建設しようとした平泉の精神性が高く評価されたため。単に復元するだけでなく、その精神性を伝えれば世界に大きなアピールができる場所となる」と八重樫さんは見ている。

地元の人々は、この平泉の持つ思想的な文化を知るうち、次第にわが町に対する愛着が誇りに変化し始めてきている。八重樫さんは、町民の「地元力」とでもいうべき平泉への自信をも同時に掘り起こして歩いたのだ。

見えない平和思想を伝える地元の力 シルバー・ボランティアガイド

コアゾーンとなる文化遺産を見て回る際に、ぜひとも必要となるのが観光ガイドの存在。「中尊寺内にガイドはいるけれど、平泉全域をガイドできる人材が不足しているのが現状」と語るのは「古都ひらいずみガイドの会」事務局長の関宮治良（せきみやはるよし）さんだ。商工会議所事務局長でもある関宮さんは、2003 年に「シルバー・ボランティアガイド」の養成講座を立ち上げた。リタイヤした人の生涯学習の一環と、生まれ育った地元の持つ魅力に気づいてもらいたいとの想いもあった。講座には、毎回予想を超える応募があると関宮さんは顔をほころばせる。現在は 14 人のシルバー・ボランティアガイドが活躍している。

関宮さんは、ガイド養成に関して３つの基本スタンスが必要だと語る。平泉にはいろいろな人が観光で訪れる。歴史に深い興味を抱いた人もいれば、たまたま立ち寄った人もいる。第一の基本は、そんな人たちに対して同じ目線からガイドをする「やさしさ」が必要だと語る。

第二は「歴史は自分の憶測で勝手につくらない」ということ。歴史を常に客観的にとらえ、平泉の正確な歴史を伝えることが、ガイドとして重要なことである。歴史的資料にはさまざまなものがある。そこに憶測や主観が入り込むことが多いし、歴史に魅せられた人たちが陥りがちなことだ。「各地で義経伝説がおもしろおかしく語り継がれているように、そこにはロマンや奇跡を期待しがちだが、何よりも主観で語らないことが大切」と関宮さんは釘を差す。

さらに関宮さんは「平泉には目に見える史跡があまり多くない。平泉に砦や城壁などが少ない理由は、藤原清衡が戦を想定したまちづくりをしなかったため。争いや殺生を心から恥じ、極楽浄土を本気で形にしようとしたのがこの町であり、そこが最大の魅力」と語る。目で見えるものよりも、むしろ目で見えないもの。平泉がつくられた平和の理想郷への思想そのものを、ガイドする人にいかに感じて共感してもらえるかが第三の基本だという。そのためには、地元の人の奥州藤原文化への理解がぜひとも欠かせない。

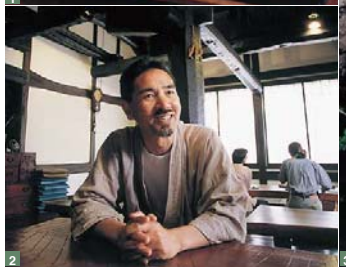
世界遺産登録となると、海外からの観光客も増える。そのため、英語と中国語の通訳ガイド養成講座も 2004 年から開設した。ここにも多くの人が応募してきたという。しかし、国家試験をパスするにはかなりのスキルが要求される。今、熟年パワーの地元力が試されている。

元エンジニアの発想が生み出す 地元にこだわった絶品蕎麦「地水庵」

「史跡も大切だけれど、その地で出される食も大切」と語るのは平泉の手打ち蕎麦の店として有名な「二足の草鞋（わらじ）　地水庵（ちすいあん）」のご主人、伊東信治（いとうのぶはる）さんだ。平泉の近隣で生まれた伊東さんは、医療用電子機器のエンジニアとして関東で就職。各地の名店を食べ歩くうちに、蕎麦のおいしさに魅せられていった。

「田舎蕎麦という言葉が嫌いだった。洗練されてなく下品なイメージ。ならば、地元で自家栽培した蕎麦で殻を入れない本格的な蕎麦を出そうと思った」

伊東さんは 41 歳のときに会社を辞め、現在の地に店を開いた。畑を手に入れ、蕎麦の



1「古典蕎麦」。太めの麺だが、十割の蕎麦でこの滑らかなのど越しは珍しい。かむと蕎麦の香りがいっそう濃くなる。ほかの店では味わえないオリジナルの蕎麦だ 2 ご主人の伊東信治さん。今後は、この店で出すすべての蕎麦を自家栽培でまかないたいと語る 3 4 5 高橋さんのつくった炭は、地元の陶磁器の店「せき宮」にもディスプレイ用に分けている。ここの女性店主は東京からのUターン組で、岩手県内の作家を多く扱うユニークな店づくりで人気 6 田植え時期の風景。水田に映りこむ自然が美しい

自家栽培を始める。店で出すすべての蕎麦をまかなうまでには至っていないが、水は近くの沢から運んだもの、天ぷらにする野菜は、有機栽培をしている農家から分けてもらっている。地のもの、地の利を最大に生かした平泉でしか味わえない蕎麦の追求のため、伊東さんはさらに知恵を加える。

自家栽培蕎麦を使った十割の「古典蕎麦」は粗挽きにした蕎麦の実を蕎麦粉でつないだ珍しいタイプ。この手法の発想を聞くと「粗挽きソーセージ」と、こともなげに答える。自家栽培の蕎麦しか使っていないため、一日10食ほどしか用意できないそうだ。一方、天ぷらにも驚かされた。そうめんよりさらに細い麺を渦巻状にし、カリッと薄く揚げたものが野菜天ぷらに付いてくる。伊東さんは照れながら「小麦粉に蕎麦粉を混ぜ、細い穴から押し出したもの。天ぷらのおいしさは衣にもあるので、衣自体も味わってほしくて試行錯誤した。言わば蕎麦粉の天ぷら」と語る。元エンジニアの本領発揮だ。

観光地だから一見(いちげん)の客が多い。団体で訪れる客には、素早く大量に出すことが要求される。しかし伊東さんは、ゆっくりと時間をかけて、平泉自体を楽しみ、「地水庵」の空間と、この地でしか味わえない滋味をしっかり感じてほしいと考えている。全国の蕎麦好きの間では、ここはすでに有名な店になりつつある。ここの蕎麦を目的に来店し、それからついでに中尊寺などを散策する人も増えてきた。この味がリピーターを増やしているのだ。現地にこんな店があるということも、平泉の地元力を高めている。

地方暮らしを楽しむプロの「地元力」が、平泉の新たな名産品を生み出すパワーになる

前出の高橋誠さんは、多彩な趣味の持ち主だ。子供のころから何でもつくってしまう性格のようで、トラクターやいろいろな工具が置いてある作業場は、休日はさながら趣味のスペースである。

高橋さんが最近凝っているのは「炭焼き」だ。最初はドラム缶で始め、ここ数年は本格的な窯で炭を焼くようになった。自家用のナラ炭、タケ炭を作るほか、野菜や栗、パイナップルなども炭にしてオブジェとして楽しんでいる。場所柄、炭焼きに使う木材は豊富にある。自宅の床下に撒き、居間のこたつは、もちろん昔ながらの炭のこたつだ。ほかにも脱臭材など、さまざまに応用が利く。

炭焼きのおもしろさは窯を開ける瞬間だという。いったん火を入れれば、炭化が進んだ状態を見極めるのは煙だけだ。「青い煙が消える瞬間が窯をふさぐタイミング。あとは冷えるのを待ち、出来具合がわかる窯開けの瞬間までがワクワクの時間」と高橋さんは、なんとも楽しそうである。修学旅行で訪れる神奈川県の中学生たちに、自宅で炭焼きを教えてもいる。趣味の域を超えて、もはや地元の楽しみを伝える伝道師だ。

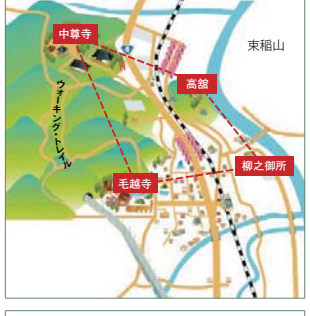
「山と田んぼに囲まれた何もないところ」と遠慮がちに語る町人は多いが、田舎にあこがれる人から見れば、これほど楽しみのチャンスに恵まれた土地はないのではないかと考えさせられる。家のまわりすべてが遊び場と化すのである。「地元力」は、高橋さんのような地域を楽しむ力からわいてくる。

平泉は、岩手県で2番目に小さな町にもかかわらず、年間20を超える祭りやイベントを行ない多くの国宝や重要文化財を守り続けてきた。そのため、防災やイベントの際の交通整理の役割を担う組織として、消防団を中心に、警察や行政が一体となった地域住民による緊密なコミュニティが形成され、長年にわたってうまく機能してきている。「消防団の協力なしにこの町は動かせない」と人々が語る。もちろん消防団は、住民のボランティアによるものだ。この住民の結束力も、今後の平泉のまちづくりを担う大きな「地元力」になるだろう。

まちづくりの一環として、「道の駅」で販売する地元の名産品の掘り起こしも新たな課題だ。漆器で有名な「秀衡塗り」など伝統の逸品もあるが、高橋さんのような隠れた達人が生み出す名産品に今、期待がかかっている。町役場農林課が主催した「名産品コンテスト」では、ふきのとうと味噌をアレンジした「ばっけみそ」が優勝した。メロンづくりの達人が手塩にかけた「黄金メロン」もあると聞く。小麦粉を練って伸ばした「はっとう」の達人もいる。遺跡発掘隊では、北上川で獲れるモズク蟹でだしを取ったすいとんが、まかないとして食べられているそうだ。モズク蟹といえば、上海蟹と同じ種類のものである。聞いただけで食中枢が刺激される。そんな平泉の新しい名産品が並び、観光客の舌を魅了する日が間もなくやってくる。NE

平泉のまちづくりと地域振興関連事業

平泉バイパス開通や、都市計画の変更などインフラ整備については、国の直轄事業として「全国都市再生モデル事業」地区に採択された。これを受けて平泉町では「まちづくり構想検討委員会」を立ち上げ、課題の整理、まちづくり構想の検討を進めている。また、2003年度に国の直轄事業として採択された「世界遺産へ向けた庭園文化都市まちづくり構想」調査事業をベースに、国・県と連携しながら、2004年度に創設された「まちづくり交付金」も今後活用し、平泉の特性を生かしたまちづくりを推進している。



平泉町に関する詳しい情報は
平泉町観光商工課ホームページまで。
➡ http://www.town.hiraizumi.iwate.jp/

町長インタビュー

史跡と共に生きてきた平泉の宿命をまちづくりにプラスに生かす

平泉町 千葉和男 町長

●浄土景観を前面に出したまちづくり●

現在、平泉町では「歴史と文化が調和したまちづくり」をテーマに、「平泉町都市計画マスタープラン」を策定中です。世界遺産登録を視野に入れて、歴史と文化による都市再生と景観に配慮したまちづくりが基本となりますが、自然環境保全とともに現在の優れた景観資源を保護していくため、景観条例を制定しました。住民の方にはたいへん厳しい内容になりましたが、史跡と共に生きてきた平泉町の宿命ではないでしょうか。「浄土景観」という平泉独自の風土を守り、育てながら、穏やかでまとまりのあるまち並みを実現していきたいと考えています。

●観光ポイントをゾーンに広げる●

景観整備と共に「歩いてまわれるまちづくり」にも力を注いでいきます。道の駅とJR平泉駅を基点に、平泉各所に点在する史跡や景観をじっくりゆったりと楽しんでいただけたらと考えています。そのためには、平泉を通過する方のためのバイパス、町内の生活道路、観光客のための歩行通路の3点から道路のあり方を考え、互いにできるだけ混在しない、安全で利便性の高い通行設備の設置が必要と考えています。

●平泉ファンを増やして行きたい●

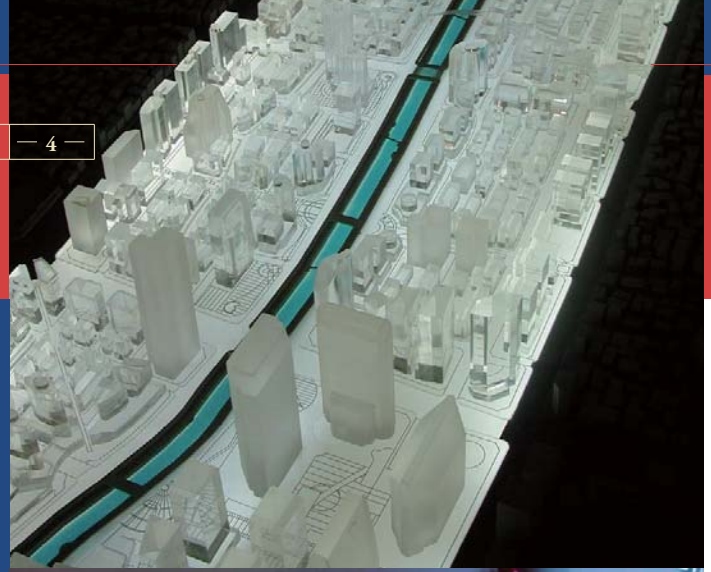
古来から日本各地の文化と結びついていたこともあって、平泉町では数多くの祭りやイベントが季節ごとに行われています。7月末の水掛御輿は、松尾芭蕉の生誕の地である深川からご協力をいただき、町民参加型のお祭りとして長い時間をかけて定着したものです。8月の大文字まつりは京都とのつながり。1月に行われる毛越寺二十日夜祭は、躍動的で祭りのなかでも最も人気があります。見るだけでなく、季節での違いを感じて、町民と触れ合い、平泉の魅力をできるだけ多くの人に知っていただきたいと思います。西行が愛した束稲山の桜の再現も進んでいます。現在建設中の堤防も、完成後は植栽を施し、花・草木がふんだんにある浄土の景観を回復したいと考えています。「一度訪れれば十分な町」ではなく「何度でも足を運びたくなるような町」に感じてもらえれば最高ですね。

「春の藤原祭り」義経公東下りの行列。2005年のNHK大河ドラマ「義経」の放映も決定した

●プロフィール●
1968年岩手県庁入庁。総務部財政課財政主査、総務部地方振興課長補佐、大船渡市助役、土木部総務課長、農政部次長を歴任後、2000年岩手県庁退職。2001年1月に平泉町長に就任。祭りの音を聞くと血が騒ぐ。59歳。

都心部の清流復元でヒートアイランドの緩和なるか

人口1000万人を超える大都市ソウルの中心部で、大規模な河川復元事業が進められている。漢江に合流する延長11kmの清渓川は、1950年代にコンクリートで覆われ、1日10万台もの車が往来する幹線道路に姿を変えている。構造物の老朽化と環境問題から2003年7月、高架道路を撤去し、自然河川に戻す復元工事が着工された。環境だけでなく石橋などの文化遺産、歴史や文化も併せて復元し、川を文化観光資源として活用するというこの計画は、いま世界各国から注目されている。



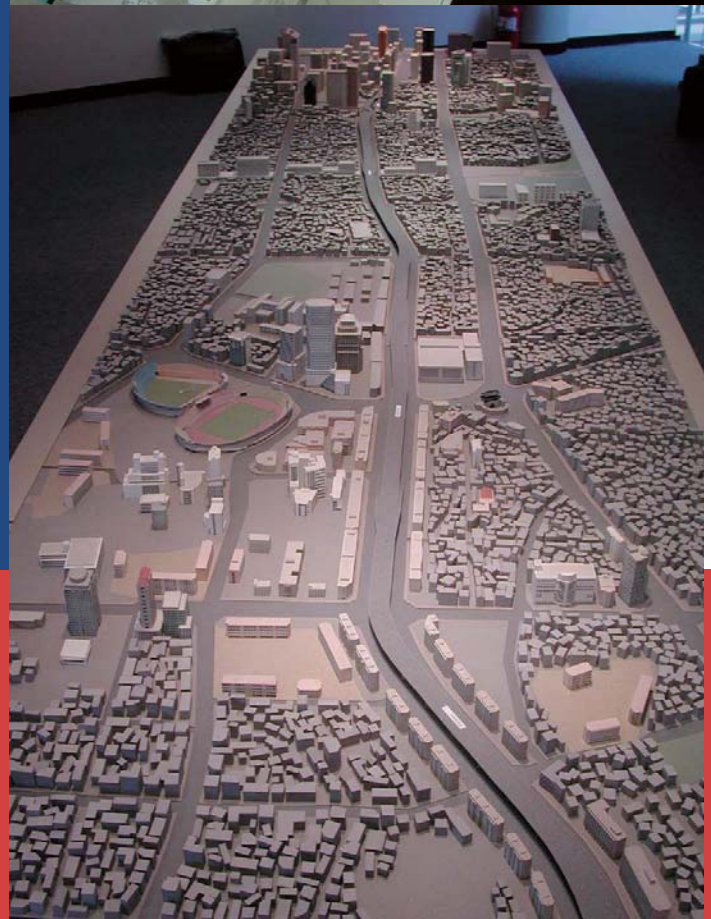


写真 -3　清渓川弘報館の展示ジオラマ
［上］対象地域周辺の将来イメージ
［下］施工前の清渓川復元事業対象地域周辺

ソウルの大規模な清流復活事業「清渓川復元」

文……一ノ瀬俊明（独立行政法人国立環境研究所 地球環境研究センター 主任研究員）

はじめに

河川など都市内の水面は、都市を構成するほかの地表面と比較して表面温度が低く、そこからの蒸発が盛んであり、その場所の地表面が大気を暖める効果は小さくなっている。これら水面の空間的な規模は都市全体に比較して決して大きなものではないが、水面付近とほかの地表面上との間には、郊外と都市の気温差に相当する気温差を生じることもある。では、今日盛んに提唱されている環境共生型まちづくり、例えば、都心における清流の大規模な復活は、本当に都市の暑さの緩和に効果があるのだろうか。これを検証する絶好の機会が、今まさに訪れようとしている。

清渓川復元の意義

かつて清渓川は、ソウル市中心部を東西に流れ、漢江に合流する延長約 11km の都市内河川であった（**写真 -1、図 -1**）。洪水対策として大規模な改修工事の行われた李氏朝鮮の時代から、天然の都市下水路としての性格を有していたが、20 世紀初頭のソウルへの人口集中は、清渓川周辺地域を代表的な人口密集地域へと変え、河川周辺地域の衛生問題を深刻化させた。この問題に対処するべく行われた 1950 年代後半に始まる本格的な覆蓋道路化（暗渠化）工事を受け、沿道の市街化と交通量の増加が進行し、70 年代初頭には約 6km の清渓高架道路（対面通行 4 車線）も完成した。これは東大門市場などソウル市の繁華街を通過している。今日、かつての清渓川の面影を見ることはできない。

しかし近年、聖水大橋崩落事故を受けてのインフラ一斉点検の結果、高架道路や覆蓋構造物にも安全性の問題（手抜き工事、暗渠からの腐食性ガスによる大気汚染）が指摘された（**写真 -2**）。

また、人と自然が中心となる環境にやさしいまちづくりが見直されており、この機会に清渓川を都市内の大規模清流・親水空間・高価値ビオトープとして復活させようという動きが市民サイドからも巻き起こっていった。

このような背景のもと、ソウル市政府は、この高架道路を数キロにわたって撤去し、従前の都市内河川（清渓川）を復活させる事業を決定した（**写真 -3、4、図 -2、3**）。

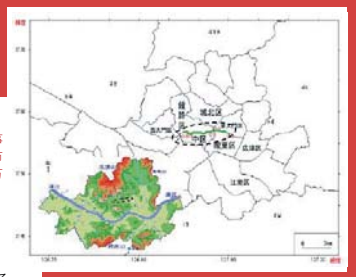


図 -1　ソウル市における「清渓川復元」事業対象地（点線で囲まれた地域）。ソウル市（面積 605.52km²:1997 年、人口 1026 万人 :2000 年）の範囲を左下に示す

写真 -1　1920年代の清渓川。川で女性らが洗濯を行っていた
（提供：ソウル市清渓川復元推進本部）

写真 -2　廣橋付近の暗渠空間の様子

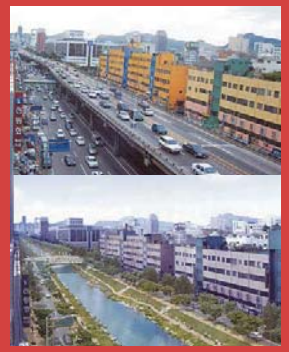


写真 -4（上）東大門付近における施工前の景観。新平和（シンピョンワ）市場屋上から西方を望む
図 -3（下）改修後の将来予測
（提供：ソウル市清渓川復元推進本部）

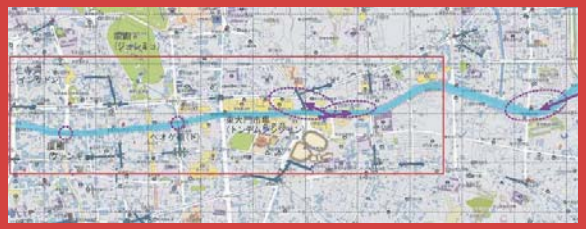


図 -2　清渓川復元事業対象地域周辺図。清渓川路のうち施工対象区間に黄色のハッチをかけた。赤枠の範囲が **写真 -3［下］**のジオラマに示されている。紫の楕円と矢印が各写真（**写真 -4、5、6、8**）の撮影個所と視線方向

写真 -5　城東（ソンドン）区庁から西方を望む
［左］2003 年 6 月中旬（高架道路閉鎖直前）
［上］同年 8 月中旬（高架道路撤去工事中）

図 -4　清渓川復元工事の方法および工程

（提供：ソウル市清渓川復元推進本部）

写真 -7　かつての廣橋

そこでの橋踏み行事

石築護岸

1953 年の廣橋周辺の風景

（提供：ソウル市清渓川復元推進本部）

2003 年 7 月 1 日に着工したこの清渓川復元工事では、側道（一方通行で各 2 ～ 4 車線）を残し、高架道路を撤去するところから始まった（**写真 -5、6**）。また、その次に直下の暗渠を開削し、最終的には緑豊かな親水空間を創出するというものである（**図 -4**）。中央の高架部分を含めた清渓川（チョンゲチョンノ）路の幅は全体で 50 m前後。初年度は撤去が中心となり、次年度は河道の掘削へと進む。清渓川の流域面積は 50.96km² と狭いため、水量維持のために下水処理水なども水源として想定されている。

この復元工事は周辺地域の再開発と一体のものとして検討されており、復元後の良好な環境が周辺地域の再開発を加速させ、地域の均衡ある発展やローカルな経済の活性化にも貢献すると考えられている。復元工事に先立っては当該事業のもたらす経済効果、生態系への影響、水環境影響などに関して多面的なアセスメントが行われてきている。アセスメントの段階では合意形成に向けた国際シンポジウム（2002 年）なども開かれ、日本からは当時、国土交通省におられた島谷幸宏博士もビオトープの専門家としてパネリストに招聘（しょうへい）されている。

また、かつて清渓川には個性豊かな 14 本の石橋が架かっており、そのそれぞれが歴史的エピソードを持っていた（**写真 -7**）。例えば廣橋（クアンギョ）では、正月 15 日や節分には橋踏み行事が行われており、清渓川はソウルの歴史と文化の一部を成していたともいえる。その意味では、今回の復元事業には「600 年の古都ソウルにおける歴史と文化の回復」という意義も強調されている。

都心における清流の大規模整備

日本をはじめ世界のさまざまな都市で、都市環境の再生について大きな関心が集まっており、市街地に自然度の高いビオトープを再生するミティゲーションによる手法が注目されているが、都市内におけるこのような大規模な清流の復活は世界にも例がない。この事業の環境改善効果としては、交通量の減少による大気浄化はもとより、河川周辺の夏季における暑熱の緩和（気温上昇の抑制）効果も注目されている。今回のような大規模なミティゲーションについては先行事例がなく、数値計算で仮想的には評価され得たものの、実地（大気汚染やヒートアイランドの深刻化している現実の大都市内）でその効果を検証できる機会は世界で初めてといえる。自然共生による都市再生戦略との関連で、都市内の自然生態系としての水と緑のネットワークづくりが検討されているわが国のまちづくりにも、大いに役立つ貴重なデータが取得される、またとないチャンスである。

以上の背景を踏まえ、都心の大規模河川空間復元がもたらす夏の暑さの緩和効果の定量化を目的として、筆者らは当該事業の前後にわたる暑熱環境の総合的なモニタリング（対象地域における気象観測）に着手した。工事完成後の 2006 年夏まで継続的に一連のモニタリングおよび集中観測（8 月を中心に）を推進し、都市大気に与えられた熱負荷の経年変化および事業対象地域周辺における環境再生効果（大気・熱環境）を明らかにしようというものである。

ハイピッチで進む高架道路撤去工事

写真 -8［左］は、2003 年 8 月 13 日午前における清渓川路とペオゲ道（ド）の交差点の様子である。その 2 日後の 8 月 15 日午前には、橋げたを残して高架道路が撤去されてしまっている（**写真 -8［右］**）。このように、撤去工事は昼夜兼行の非常なハイピッチで進んでいる。工事に伴って発生する解体廃材も大変な量であるが、すべて決められた処分場に運ばれ、破砕の後、再利用のときを待っている。

一般に韓国は、政策決定に関してはトップダウン的性格が強い国のように思われている。このような大胆なミティゲーション事業が実行に移されるのもその一端といえよう。しかし、もちろん反対世論も存在する。東大門市場周辺の歩道橋上などでは、零細露天商たちが居座って営業し、ささやかな抵抗を続けていた（**写真 -9**）。この一帯は、地方から

写真 -6　高架道路撤去工事の様子

城東区庁付近

東大門市場付近の新平和市場屋上から東方を望む

廣橋付近の清渓川路・三一路（サミルノ）交差点

写真 -8　清渓川路・ペオゲ道交差点の様子

［左］2003 年 8 月 13 日午前（高架道路撤去前日）［右］同月 15 日午前（高架道路撤去翌日）

写真 -9　東大門市場付近の新平和市場屋上から。進む高架道路撤去工事の足元では、零細露天商たちがパラソルを広げて営業を続けていた

写真 -10　老朽化が進む高架道路周辺の中層住宅（高架道路閉鎖直前の 6 月中旬撮影）

写真 -11　側道はやっぱり慢性的な大渋滞（新平和市場わきにて）

写真 -12　筆者らのプロジェクトによる気象観測の様子
（左上）気温・湿度の移動観測。（左下・右）釣りざおを改良した係留ゾンデによる都市大気構造の鉛直観測。日本の TV 局も取材に訪れた

商人が衣料の買い付けに訪れる生活臭に満ちた場所である。昼どきともなれば、出前ランチ（主にチゲとライスのセット）のトレーを器用に頭に乗せたアジュンマ（おばさん）が、買い物客と恐る恐るすれ違う場面を見かける。このような現在のまちなみが一掃され、ブティックのショーウィンドウが並ぶおしゃれなまちなみへと変わることにより、彼らは生活基盤を失ってしまうのだ **（写真 -10）**。

また、清渓川路はいわば、江北（カンブク）地域（漢江の北側）を東西に貫く市内交通の動脈である。高架道路を失った現在では、その機能はほかの周辺幹線道路に移されたはずであるが、着工前にう回道路の確保や公共交通の利用案内が徹底されたにもかかわらず、予想どおり慢性的な渋滞に陥ってしまったようである **（写真 -11）**。タクシーも清渓川路にはあまり近づこうとしない。

都市開発のパラダイム転換に向けて

筆者は前述のとおり、大韓民国気象庁気象研究所および東京都立大学地理学教室との共同研究として、撤去工事に伴う高架道路閉鎖直前の 2003 年 6 月中旬より、高架道路撤去区間周辺の 11 地点（主に小学校の校庭などの百葉箱を活用）に簡易気象観測ステーション（気温、湿度）を設置し、撤去工事に伴う高架道路閉鎖直前の 2003 年 6 月中旬より 10 分間隔のデータ取得を開始した **（写真 -12）**。

また着工初期段階の 2003 年 8 月中旬には、集中的な移動観測や、サーモカメラ（地表面熱画像を記録する装置）などによる地表面大規模改変の大気環境インパクトの計測・定量的評価を行った。この期間、日本の上空に前線が居座ったため、日本では 10 月並みの気候となったが、前線の北側のソウルは連日の快晴に恵まれ、最高気温は 32 度前後に達した。日中の湿度は 40%程度であったため、東京の極暑に比べればしのぎやすかった印象もある。

このようなモニタリングを復元工事完成後の 2006 年夏まで継続することにより、清渓川復元による暑熱緩和効果が実証されることとなれば、都市開発の世界的なパラダイム転換に相当の貢献ができるはずである。この成果が日本の都市に生かされる日も近い。 NE

参考資料：ソウル市広報担当官室ホームページ　http://japanese.seoul.go.kr/chungaehome/seoul/main.htm
取材協力：ソウル市清渓川復元推進本部、大韓民国気象庁気象研究所　ICHINOSE, Toshiaki　toshiaki@nies.go.jp

■ ソウル市長の公約

2002 年 11 月、ソウル市から国際シンポジウムの講演依頼があった。ソウル市中央部を流下する、暗渠（あんきょ）化した清渓川（チョンゲチョン）復元事業の開始に当たり、参考になる話をしてもらいたいという依頼である。「詳しくはソウル市のホームページを見てほしい」とのことで、ソウル市庁の日本語のホームページを覗くと詳しい内容が紹介してある。そのとき、初めて清渓川の復元事業のことを知ったのであるが、都心の高架道路を撤去し、河川を復元する大胆な事業に驚いた。

清渓川はソウル市の中心部を貫流する流域面積 51km² の中河川である。日本でいえば、東京の神田川が 100km²、神戸の芦屋川（あしやがわ）や夙川（しゅくがわ）が 8-9km²、眼鏡橋で有名な長崎の中島川（なかじまがわ）が 18km² であるから、都市河川として決して小さい規模ではない。

清渓川を「蓋（ふた）かけ河川」とする計画は、1895 年の大韓帝国の時代にもあったが、計画を本格化させ、最初に「蓋かけ工事」をしたのは占領時代の日本である。事業が本格化したのは朝鮮戦争の終結後の 1958 年からで、最終的な完成は 1978 年である。

今回の復元工事は、延長 5.8km に及ぶもので、高架道路を撤去し、川をオープン化し、人と自然が中心になる環境を再生する事業である。高架道路の老朽化も、事業を進める大きな理由であるが、「ソウルのアイデンティティ確保」「都市管理に関する新たなパラダイムの構築」「ソウルの産業競争力の強化」を標榜し、21 世紀文化環境都市ソウルを目指すもので、その志と理念は極めて高い。この事業は、ソウル市長が選挙の公約として挙げており、2002 年 7 月の市長就任直後から事業に着手し、現在すでに高架橋撤去と、急ピッチで仕事が進められている。市長のリーダーシップと構想力、行動力には驚かされる。

具体的には、高架道路の撤去、上水道などの移設、両岸の道路の建設、橋梁の復元や水路の拡幅、流量の確保、景観の整備、夜間景観の照明などを行い、2005 年 9 月には完成予定である。平常時の流量は地下鉄への浸出水、下水処理水、漢江からの導水などによって、日量 12 万トンの水が確保される。高架道路の撤去に当たっては、バス路線の改編、地下鉄運営の改善、都心交通量を抑えるための駐車管理などを通して、大衆交通を優先し、環境や歩行者対策を重視する抜本的な交通体系の再編が図られる。

以上が事業の概要であるが、清渓川自体を歴史的な文化遺産ととらえ、清渓川の石造りの古橋を復元するなどして、水辺文化ストリートをつくりあげようというスケールの大きい事業である。おそらく清渓川の復元により、ソウル市は世界的にも着目され、大きく変貌するであろう。

> 市長のリーダーシップで
> 始まった清渓川の
> 復元プロジェクトに期待
>
> 文・写真……**島谷幸宏**
> 九州大学大学院工学研究院　環境都市部門
> 流域システム工学研究室　教授

■ 住民参加の手法に関心を寄せる

2002 年のシンポジウムにおける私の講演のなかでいちばん反響を呼んだのが、合意形成の話であった。当時、国土交通省の武雄河川事務所の所長であった私は、松浦川のアザメの瀬で湿地の再生に取り掛かっていた。その事業では徹底した住民参加の手法を取り入れ、「繰り返し話し合う」「自由参加の検討会」「やってよ、ではなくやろう」などを掛け声に、繰り返し話し合いを続けていた。会場からは、「私たちも合意形成で苦労している。もっと話を聞かせてくれ」「今回の事業は周辺の市民生活に大きな影響を与え、合意形成が必要である。そのポイントは？」と矢継ぎ早の質問。聴衆の住民参加への関心の高さに非常に驚いたものである。その後の経過を見ていると、公聴会の開催や市民委員会の活動など、住民の理解を得るための住民参加の努力が続けられている。

■ 21 世紀の課題を見据える

さて、わが国は現在不況下で財政構造改革の途上ということもあり、自然や文化に対して投資を行うという雰囲気にはない。しかし、中国の上海はニューヨークを超える摩天楼都市を目指し超高層建築ラッシュで、ヨーロッパやアメリカでは大規模な自然再生事業が開始されている。アメリカのエバーグレイズの湿地再生はなんと 1 兆円プロジェクトである。このように、環境の復元再生は、20 世紀に環境を劣化させてきた人類の、反省を込めた 21 世紀への重要な課題である。

ソウル市の清渓川の復元事業は都市中心部の再開発に、都心に自然を再生するという新しいパラダイムを提示した。このような動きは、周辺諸国にも波及していくことであろう。わが国も自然再生法、景観法と環境に関する新しい法律が制定され、方向性は出てきたように思う。次世代あるいは次々世代が誇りに思えるような、環境再生を機軸とした新しい国土形成や都市形成の理論を構築しなければならない時期にきている。 NE

風景になじみながら、
訪れる人をさりげなくサポートする。
TOEX はいつもそんな環境をめざして、
人々のふれあいの場をより快適にするための
商品開発を行っています。

Product Message
［プロダクト メッセージ］

富士山を望める広々とした公園。見やすくわかりやすいサインで園内に点在する施設へスムーズに誘導します（富士山レーダードーム公園／写真下も）

親子そろって、遊具感覚で足裏マッサージを楽しめます（練馬区内の公園）

人々に快適な環境を求めて

富士山レーダードーム公園（山梨県富士吉田市）
［サイン］クルーゼ A タイプ
［案内板］TM-51C026

練馬区内の公園（東京都練馬区）
［健康資材］自然浴さんぽ路 1 型

駒ヶ岳サービスエリア（長野県駒ヶ根市）
［フェンス］グリッドフェンス T 型
［水飲み］TM-74C065

ドッグランは愛犬が飛び出さないよう扉を二重に配置。
水飲み場で足の汚れも落とせます
（駒ヶ岳サービスエリア）

木々が生い茂る自然豊かな公園に、擬木製品が溶け込んでいます（一本橋公園）

昔ながらの風情が残る小川を、安心して、眺めて歩ける散策路になっています（一本橋公園）

「自然浴さんぽ路」を防護柵わきに配して、転落防止と足裏マッサージを兼ねました。バリアフリースペースも完備（野添であい公園）

擬木柵が借景の五重塔と相まって、日本的な風景を醸し出しています（野添であい公園）

一本橋公園（山形県西村山郡）

［柵］ロープ柵 TM-62P019（特注）
［テーブルセット］TM-72P030
［水飲み］TM-74C065

野添であい公園（兵庫県加古郡）

［健康資材］自然浴さんぽ路 1 型
［柵］擬木柵 TM-63P037、
PSI ＋サポートレール 1 型（特注）

広がりのある水辺空間に機能性と彩りをプラス

Product Message

夕日が落ちるダイナミックな日本海に映えるデザインの高欄。肌触りの良い木目タイプの手すりが海岸へと導きます（石地海岸）

夕暮れに赤く点灯するソーラーライトが港を彩ります（西戸崎旅客待合所）

石地海岸（新潟県刈羽郡）
［高欄］DK1 型
［手すり］サポートレール 2 型

西戸崎旅客待合所（福岡県福岡市）
［柵］擬石柵 GKF-102T（特注ソーラーライト付）

手すりづたいに水辺に降りられる親水型河川。転落防止にリサイクル材の人工木柵が使われています（朝霧川）

✣ **朝霧川**（兵庫県明石市）
［柵］楽樹 LJ 型
［手すり］サポートレール 1 型

✣ **あさぎ里山公園**（大阪府茨木市）
［柵］POS-20-11（アルミハンドレール付）

✣ **新居傾斜堤防**（高知県土佐市）
［柵］PSI-20-11（特注色）

池を臨む張り出し部分は、アルミ柵の本体を加工して美しい曲線を実現しました（あさぎ里山公園）

真っ白な柵が、さわやかな海岸風景をより引き立てます（新居傾斜堤防）

交差するシェルターが通路をスタイリッシュな空間に。竹と石畳とアルミのシャイングレー色が、落ち着いた和の雰囲気を演出しています
（ファミールグラン代々木西原デクスターハウス）

毎日のことだから。居住空間を適ごしやすい場に

日よけ、雨よけに快適な積雪タイプの通路シェルター。傾斜・コーナーの３次元加工がきれいな曲線を描きます（下野幌団地）

ファミールグラン代々木西原デクスターハウス
（東京都渋谷区）
［シェルター］アレクヤード AY-2 型

下野幌団地（北海道札幌市）
［シェルター］クレフヤード FXA2 型（特注、積雪タイプ）

センチュリー病院（兵庫県姫路市）
［手すり］サポートレール２型（特注、ビーム部分アルミ形材＋樹脂被覆、光触媒塗装）

ゆるやかな曲線を描くヒーリングガーデンの手すりは、抗菌対策の光触媒塗装で清潔さを保ちます（センチュリー病院）

Product Message

街の顔、玄関口は機能的かつシンボリックに

Product Message

短く区切ることで、ファニチャーに近い印象を与えるベンチ柵が、新しく開通した九州新幹線の駅前を彩ります（新八代駅）

背もたれと腰掛けにゴムを使用したベンチ柵。人に優しいだけでなく、空間のアクセントにもなっています（鹿児島中央駅西口）

両支持柱は幅 7 m、片支持柱は幅 5.5 m。鉄骨を用いて、安心で快適な駐車スペースを実現しています（伊勢中川駅東口広場・西口広場）

点字シートを設け、より多くの人に優しい手すり。連結したベンチがユニークな待ち合わせの場となっています（新八代駅）

新八代駅（熊本県八代市）

[柵] ユニットレール 4 型（ベンチタイプ）
[車止め] ユニットレール 4 型（車止め I タイプ）
[ベンチ] ユニットベンチ
[手すり] サポートレール 1 型（点字シート付）

鹿児島中央駅西口（鹿児島県鹿児島市）

[柵] ユニットレール 4 型（フロントタイプ、ベンチタイプ特注）

伊勢中川駅東口広場・西口広場（三重県一志郡嬉野町）

[シェルター] クレフヤード FXA-1 型（特注）、クレフヤード FXA-2 型（特注）

PROFILE
協力者紹介

竹田直樹
たけだ なおき

1961年生まれ。1984年、千葉大学園芸学部造園学科卒業。1992年、野外彫刻に関する論文で博士（学術）。画廊、造園コンサルタントなどを経て、1999年より兵庫県立大学自然・環境科学研究所助教授として淡路景観園芸学校でランドスケープデザインと環境芸術論を担当。著書に『パブリックアート入門、アートを開く』（公人の友社）、『日本のパブリックアート』（誠文堂新社）、『やさしい風景学』（マルモ出版）など。90年代中ごろまでに日本全国の野外彫刻を調査し、その状況を客観的に明らかなものとした。

シヲバラ タク
しおばら たく

1989年多摩美術大学卒業。フォトジャーナリスト。アンビエント・デザインセンター㈱取締役を経て、現在アンビエント・デザインスタジオ代表。海外の都市計画、環境問題、アート、建築等についての写真と論説。『エスクァイア』『カーサ・ブルータス』『ランドスケープ・デザイン』誌他に掲載。92年APAビエンナーレ出品。2000年全国7都市で写真展「ヴァニシング・ポイント」、講演会「ドイツ・エクスポ2000と環境開発」開催（東洋エクステリア主催）。

岡井有佳
おかい ゆか

京都府生まれ。大阪市立大学工学部建築学科卒業後、1995年建設省（現、国土交通省）に入省。住宅局、国土庁土地局（現、土地・水資源局）などを経て、2001年から仏政府給費留学生として、渡仏。2003年パリ第X大学都市整備・地域開発高等専門研究課程修了。在仏中、OECD（経済協力開発機構）に勤務。現在、東京大学先端科学技術研究センターにて、フランスの都市行政、都市整備について研究中。一級建築士。主な著書に『まちの再生ハンドブック』共著、『高齢者とまちづくり』共著（風土社）など。

一ノ瀬俊明
いちのせ としあき

1963年長野県生まれ。87年東京大学理学部地理学教室卒業。89年同大学院都市工学専攻修士課程修了後、営林署員、東京大学助手等を経て、96年より国立環境研究所地球環境研究センター主任研究員。工学博士。中国上海・華東師範大学資源与環境科学学院地理学系・顧問教授。都市環境、地理学、中国環境問題などが専門。共著に『地球環境と巨大都市』（岩波書店）ほか。ソウルのほか、中国各地のフィールドで研究活動に取り組んでいる。
http://www-cger.nies.go.jp/ichinose/

島谷幸宏
しまたに ゆきひろ

1955年山口県生まれ。80年九州大学大学院修士課程修了土木工学専攻。80年建設省入省、山梨県、建設省土木研究所都市河川研究室を経て、93年より河川環境研究室長。同所にて河川環境の研究、技術指導に従事。2001年7月より国土交通省九州地方整備局武雄工事事務所所長。松浦川のアザメの瀬・自然再生事業、水みちマップ、佐賀水ネットの立ち上げなど、河川環境、住民参加などを考えた川づくりに取り組む。2003年11月より九州大学大学院工学研究院教授。著書に『河川環境の保全と復元』など。

岩田明子
いわた あきこ

東京生まれ。日本大学で教育学の学位を取得。卒業後大成建設に6年勤務。1995年渡米。98年コーネル大学ランドスケープアーキテクチャーマスタープログラム卒業。95年ジェームズ・ローズセンターデザイン賞受賞。98年ナショナルASLA優等賞受賞。現在フロリダ、フォートローラーデールのEDSAに勤務。最近のプロジェクトでは教育学科出身のバックグラウンドを生かして関わったフロリダのノバ・サウスイースタン・ユニバーシティ、ジム＆ジャン・モラン・ファミリーセンタービレッジ、早期有事教育研究所等が2003年に竣工。

［撮影協力］西村 満（ニシムラ・スタジオ）、田中宏明（サン・プロダクション）、加藤幸雄（キャッチ・ボックス）
［ディレクション］高山佳代子、百瀬かほる（フォンテルノ）［アートディレクション＆デザイン］盛田尚弘

TOEX
“トエックス”と呼んでください。

東洋エクステリアのホームページアドレス
http://www.toex.co.jp

ホームページのアンケートにお答えいただくと『Nelsis』専用バインダーがもれなく当たります。
ご希望の方は→ http://www.toex.co.jp/public/nelsis/top.htm ＊バックナンバーも紹介しております。
商品図面のCADデータサービスも行っております。ぜひご活用ください。

本　　社　〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-4-12
札幌営業所　〒063-0861 北海道札幌市西区八軒1条東4-1-11 泰伸ビル5F TEL.011-640-8000
東北支店　〒981-3135 宮城県仙台市泉区八乙女中央1-1-23 TEL.022-776-8562
関東支店　〒168-0073 東京都杉並区下高井戸5-4-41 TEL.03-3290-8560
長野営業所　〒381-0024 長野県長野市南長池761-5 ビルド M1F TEL.026-263-0861
静岡営業所　〒422-8035 静岡県静岡市宮竹1-13-18 TEL.054-238-3190
中京支店　〒468-0011 愛知県名古屋市天白区平針1-2105 TEL.052-807-5520
関西支店　〒560-0054 大阪府豊中市桜の町6-9-27 TEL.06-6844-9233
中国支店　〒731-3167 広島県広島市安佐南区大塚西3-3-51 TEL.082-849-5661
九州支店　〒818-0134 福岡県太宰府市大字大佐野481-3 TEL.092-925-3230
南九州営業所　〒890-0055 鹿児島県鹿児島市上荒田町35-5 みずほ福永ビル101 TEL.099-256-8955

＊本誌掲載内容および写真・図版の無断転載はかたくお断りします。

STREET FURNITURE

世界のストリートファニチャー ❹
［スペイン：バルセロナ］
文・写真／岩田明子

Spain

空飛ぶじゅうたんのようなベンチ

バルセロナは洗練された地中海の都市である。19世紀から現代まで、バルセロナはヨーロッパ近代都市デザインのパイオニア的役割を果たしてきた。地中海という歴史的な風土のなかで、その役割を果たすにはそれだけの情熱とパワーが必要だ。バルセロナはアーバンエレメント産業の歴史も古く、パイオニア精神と伝統、自然と自由を尊重するカタルーニャ精神に育まれた現代都市文化を持っている。その精神の両面性はガウディをはじめ多くのクリエーターを刺激し、この地中海都市の伝統と未来を支えている。バルセロナはまた、海の都市である。アーバンエレメントも時代を超えて海を表現してきた。街のさまざまな場所で、その地中海のきらめきやゆらぎをストリートファニチャーに見ることができる。

バルセロナに程近い浜辺で見つけた空飛ぶじゅうたんのようなベンチは、地中海の柔らかい波を模したようなストリートファニチャーである。くぼみが人間の身体にフィットするようになっているところも興味深い。彫刻的なこのベンチは公園や芝生の広場、キャンパスなど都市の風景に夢を与える。

まるでパブリックアートのようなベンチはステンレススチールで強化されたキャストストーンでできている。バルセロナ在住のエミリオ・ファレ・エスコフェ率いるデザインチームによるデザイン

TOEX
“トエックス”と呼んでください。

住生活グループ
わたしたちは、住生活グループのメンバーです

アーチ屋根を選びますか。
それともフラット屋根を選びますか。

バス停・シェルター・駐輪場

フラットヤードFY型

2004年11月発売

東洋エクステリア株式会社 http://www.toex.co.jp

R100 PRINTED WITH SOY INK 本カタログは資源の有効活用のため、古紙配合率100%の再生紙と大豆油インクを使用しています。

カタログコード 05
ER05
04100052 FON-TP